

みんなが喜ぶことに
力を尽くした

山田貞策

さん



養老町教育委員会

みんなが喜ぶことに
力を尽くした

山田貞策

さん

養老町教育委員会

はじめに

昭和五十年初め古文書読解の指導を受けに田中育次氏（養老町史編纂者）を訪ねた時、話のついでに「山田貞策さんは偉い人やなあ」と呟き、何も知らない私に手短かに話して下さったのが山田貞策翁を知った最初である。そのとき私は養老町の人でなかった。

其の後、養老町に移り、町の文化財保護協会の機関紙に掲載された翁の福島での干拓事業、薩摩義士顕彰活動の断片記事を先の田中氏の話と合わせ読む程度だった。

平成十三年だったか当時の池辺地区公民館長内堀實氏から翁の干拓された福島県八沢浦や藤沢市の翁の後継者宅を訪問された際の資料をもとに翁の記録を纏める様話をいただいたがとても引き受けできる力を持ち合わせない上に、地元に住られ実際に干拓地等を見て来られた方が執筆されるのが最適だとお断りしたのである。

それが平成二十四年の夏、町教育委員会中島和哉氏より翁の記録の纏めをする様強い要請を受けた。が前の経緯もありお断りしたのであるが、年とともに翁を知る手掛かりが薄らいでいく一方の今日、今を逃してはもうできないからと・町もできる限りの応援を惜しまぬと・の言に私の最後のご奉公のつもりで耄も顧みず、早速内堀氏に事の成り行きを話し、快き資料の提供を願い、着手した次第である。

だが翁の活躍された場は遠く福島県であり、先般の東北大地震、原発の大被害地で往時のものは全部破壊、悉皆無であるとのこと、地元養老大巻でも翁を知る人はなく、後裔の方々も昭和三十年代この地を離れ遠く住われて翁は勿論、山田家を知る人は極く僅かに、しかもかなりの高齢者である。平成二十五年一月津島市に鷲野佳子さん（翁の孫）を訪ねた際、もう二年早かったら・と惜しまれたが全く左様

今は残された僅かのものを頼りに出来得る限り翁の生きざまを探りたい一念である。

凡 例

- 一、本書の執筆は下記の様な資料に基き、山口一易が行った。
- 一、頭書に山田貞策さんはこんな人だったと知ってもらう為に概要を記すことにした。
- 一、山田貞策さんを単に翁と表記する。

八沢浦千拓年表、千拓事業、翁の略歴について

内堀實氏から借用のもの、山田家所蔵の平成五年刊行の「八沢千拓の歩み」「県営湛水防除事業八沢地区概要書」及び八沢小学校での「八沢浦千拓史」

薩摩義士顕彰について

翁著の「宝暦治水薩摩義士事蹟概要」

八沢浦物語について

山田家所蔵「八沢浦物語」

山田家墓域について

養老町大巻の山田家個人墓地

訪問地について

藤沢市在住の山田ムツ子氏、山田裕氏、山田昌子氏、津島市在住の鷺野佳子氏、藤原照子氏、藤原星子氏、相馬市在住の高橋貞子氏の手紙、木曾川文庫訪問の際聞き得た事柄に私見を加えて列記。

翁の心意気について

町教育委員会実施の文化財調査より

特に村上圭二氏、田中憲策氏、直江村文書

震災前の八沢浦について

山田家所蔵写真

震災後の八沢浦について

震災被害状況筆者の日記特別記事より

八沢浦現場調査

目次

1.	山田貞策翁の概要	1
2.	山田貞策翁の略歴	4
3.	八沢浦干拓年表（福島県相馬郡鹿島町立八沢小学校編 平成五年）	9
4.	八沢浦干拓	16
5.	薩摩義士の顕彰活動	48
6.	山田家墓塋（個人墓地）	66
7.	山田家の子孫の方々から	71
8.	八沢浦物語	83
9.	翁の心意気 業績を偲ぶ	91
10.	震災前の八沢浦の写真	104
11.	震災後の八沢浦	106

1. 山田貞策翁の概要



慶応三年二月七日生

昭和十九年七月九日没

七十八才

号

耕読堂柳坡

山田照子保管の八沢浦のアルバムより

活躍の概要

山田貞策翁は慶応三年（1867）二月七日山田運四郎の長男として、池辺村大巻小字高柳に生まれる。幼名は篤、貞策は通称で、耕読堂柳坡と号した。

先祖山田正悦は寛文年間（1750）に高柳野に移住し、田畑を開拓して、高柳新田と称し、代々その庄屋を勤めた大地主の家系である。しかし山田家の所有する土地の殆どは水害を受け易い場所だったので、水腐を防ぐため、独学で排水機の研究をはじめた。明治二十六年（1893）ごろはじめて高柳に蒸気排水機を設立、水腐地帯の稲作改良・増収をはかった。水腐地帯の排水機設置の魁・干拓の先覚者と仰がれた。以降研究を続け、明治二十八年（1895）には日本全国で二番目といわれる水連式蒸気機関排水機を完成させるに至った。更に排水技術をより高性能のものにしようと、大阪岸和田より出崎栄太郎（安政六年生）という技術者を招いて、研究に研究を重ね出崎式排水機をつくり干拓事業を本格的なものにし明治三十八年（1905）には出崎式排水機製作会社を設立するまでに至った。

その力をもって明治三十九年（1906）には干拓事業として有名な福島県八沢浦の干拓事業に着手する。これは三百五十ヘクタールにも及ぶ広大な沼地八沢浦を良質な農地に換えるという大事業であった。太平洋から打寄せる大波で折角築いた排水設備が壊れるという被害に何度も見舞われた。完成までに十一人もの犠牲者と莫大な資金、そして、三十年近い歳月を費やしてやっと昭和三年（1928）に完成をみることができた。

八沢浦以外でも土地改良事業に携わったといわれているが、地元養老柏尾もその一つである。秣の滝からの利水設

備を利用して、柏尾に棚田を作ろうと計画したのである。

干拓事業ばかりではなく、大正二年（1913）には遠く朝鮮半島全羅南道に朝鮮全南殖産株式会社を組織しその取締役となり、農業経営に力を注ぎ込んだ、また養老にタクシー会社「養老自動車株式会社」を設立した。更に養老郡興農会、岐阜県農事協会を設立して小作問題の相談緩和、農事の発展に寄与、尚、濃飛農倉聯合会を組織しその会長となって、美濃米の改良・販売法の改善に努力される。

また政界にも進出、池辺村村会議員、明治三十二年（1899）には池辺村長、岐阜県会議員に当選、四年一期の活躍をみている。其の後何度も村会議員に再選され、村政の発展に尽力している。

また大正十四年（1925）八月には薩摩義士顕彰会を設け会長として義士の顕彰に尽力され、昭和三年（1928）には「薩摩工事役館跡、平田鞆負翁終焉地」碑を建立、さらに「宝暦治水薩摩義士事蹟概要」を著作刊行するなど薩摩義士偉業顕彰活動の基礎を築いている。

また明治末期にキリスト教に感し、大正初期には修徳館を建設して教会とし、時には外国人宣教師を招いて伝道を行った。またこの館を公開して地方民衆の修養慰安の場としても活用された。そのためにキリスト教の信者も信者でないものも一緒になって讃美歌を歌ったこともあったという。

以上概略の様に各面に亘って先進的活躍をした翁であったが、第二次世界大戦中の生活を静かに送り、「忍」の文字を座右の銘に掲げ昭和十九年（1944）に歿せらる。時に七十八才であった。

2. 翁の略歴



観菊会記念 昭和九年十一月

略 歴

慶応三年（1867）

二月 七日

山田運四郎の長男として出生（学歴についての記述はどこにも見られなかったが聞き取り調査より高田・佐竹直太郎、直江・杉野開吉、船附・谷金吾氏（いずれも元庄屋）らと岐阜中学校同期または同門）

明治二十四年（1891）

多芸輪中土功会議員

十月二十八日

濃尾大震災発生

明治二十七年（1894）

初めて大巻高柳地区内に蒸気排水機の設置を試行

明治二十八年（1895）

高柳地区内に水連式蒸気機関排水機を設置（機械排水機として全国で二番機と言われる）

明治三十年（1897）

七月二十一日

池辺村々会議員

明治三十一年（1898）

一月 三十日

進歩党岐阜支部発会・入党

明治三十二年（1899）

五月 三十日

八月 十日 池辺村々長

九月二十三日

府県制の改正により県議会議員選挙が実施され進歩党で立候補当選（明治

三十六年〔1903〕九月まで）

明治三十三年（1900）

池辺村農会長・養老郡農会長

明治三十六年（1903） 七月二十一日 池辺村々会議員

明治三十八年（1905） 出崎栄太郎を支援し出崎式排水機考案、製作会社を設立させる（出崎式排水機の専売特許を取得）

明治三十九年（1906） 福島県八沢浦干拓事業計画を関係首長と締結し明治四十年（1907）

十二月より工事を開始する

明治四十二年（1909） 七月二十二日 池辺村々会議員

十月 十四日 再度池辺村々長

明治四十五年（1912） 岐阜県農会議員

大正二年（1913） 朝鮮満州の農業視察

朝鮮全南殖産株式会社（資本金二百万円・約二千ヘクタールの大規模農場の経営）を全羅南道ソンジョンニーに設立

大正三年（1914） 養老村柏尾地内の六・二ヘクタールの山地開墾と頭首工の工事を開始し、

（瀬田河川などから水路へ必要用水を引き入れるための施設也）

大正十年（1921） 完成

養老自動車株式会社（資本金二万円）を設立し取締役に就任

大正五年（1916） 三月 池辺村々会議員

大正七年（1918） 七月二十二日 岐阜県農事改良会の創立に尽力

大正 八 年（1919） 養老郡興農会を設立

大正 九 年（1920） 七月二十二日 池辺村々会議員

福島県八沢浦に相馬養魚株式会社設立（開拓地の中央に八町歩の養魚場を
設け養鯉・養鰻の水産業を起す）

自宅敷地内に修徳館建設

大正十一年（1922） 福島県相馬郡新沼浦の干拓事業（約400ヘクタール）に加入

大正十二年（1923） 濃飛農倉聯合会を組織、会長となる

池辺村農会初代会長

大正十三年（1924） 七月二十二日 池辺村々会議員

大正十四年（1925） 七月 三日 池辺村教育会が創立され会長となる

四月二十八日 自宅にて薩摩義士記念碑建設第一回協議会開催

十二月二十九日 薩摩義士顕彰会設立・会長に就任、以降役館跡に記念碑建設に奔走

昭和 二 年（1927） 還暦を祝し扇面配布

修徳館を高柳講義所と改称し啓蒙活動に力を入れる

昭和 三 年（1928） 七月二十二日 池辺村々会議員

日本産業株式会社を創立、社長となる

四月 福島に八沢浦産業株式会社を創立

五月 六日 「薩摩義士平田朝負翁終焉地」記念碑の除幕式挙行

昭和四年（1929）

池辺村学務員

四月二十五日 池辺村教育会と薩摩義士顕彰会と合同で、薩摩義士追弔会を執行、以降毎

年五月二十五日に実施

昭和六年（1931）

福島県松川浦の干拓埋立漁港修築事業出願

九月二十五日 民政党で岐阜県議会議員に立候補し当選（昭和十年〔1935〕九月ま

で県議として活躍）

昭和七年（1932）

七月二十二日 池辺村々会議員

一月 「宝暦治水薩摩義士事跡概要」を著作刊行

昭和九年（1934）

自邸地内に平田朝負翁銅像を建立

十月 宮内大臣より観菊会に招待される

昭和十年（1935）

政界より引退

昭和十六年（1941）

四月二十三日

福島県八沢浦干拓地の海岸丘陵に干拓地移住者により山田神社が創建される

昭和十八年（1943）

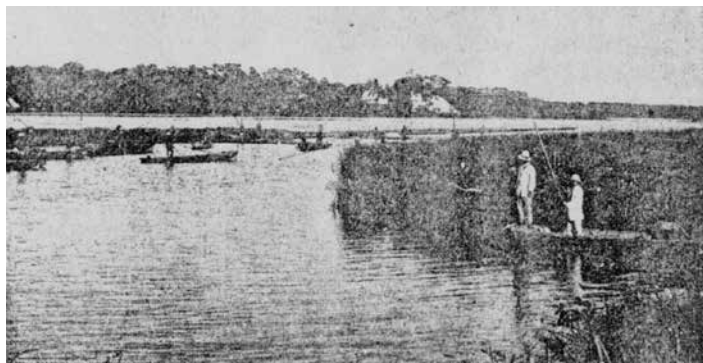
七十有余年の人生を懐顧し「忍」の一字を書す

昭和十九年（1944）

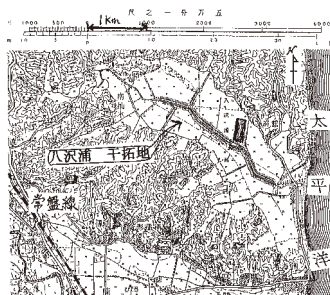
七月 九日

逝去、七十八才

3. 八沢浦干拓年表 (福島県相馬郡鹿島町立八沢小学校編 平成五年)



干拓前の八沢浦 (明治41年)



昭和初年の八沢浦



干拓前の八沢浦 (明治41年)



平成六年の八沢浦

椿井隆成 2007『町民大学資料』より

藩政期

明治九年（1876）

明治三十四年（1901）

明治三十五年（1902）

明治三十八年（1905）

明治三十九年（1906）六月

七月

十二月

八沢浦約三五〇ヘクタールの沼地と沿岸で製塩が行われる

海岸住民が孫目海岸にトンネルを掘り排水を計画したが一部しか成功しなかったので取止めとなる

沿岸の村人より浦水の流れる川をつくる様県庁に出願したが、村民の意見が対立し実現しなかった

山形県の鈴木寿三郎らが八沢浦干拓を計画したが、日露戦争のため取り止めとなる

大阪岸和田の出崎栄太郎が山田貞策の支援を受けて出崎式排水機を考案しその製作会社をつくる

岸和田の左納栄三郎が山形県の鉱山へ行く途中、上真野村の石炭調査のため鹿島町に泊り八沢浦に船遊びをして中村広吉と会う。その時川の状況から八沢浦に出崎式排水機が利用できることを予想し只野正蔵等と相談する

（旅館中村屋）

ただのしょうぞう

左納栄三郎と山田貞策の二人で実施を調査するため、日立木村長

につたき

唯野真太郎・磯部村長島卯平衛・八沢村長天野有常それに相馬郡長金指清も加わり相談、公有の土地を譲ってもらう様に申請する

八沢村の埋立と排水工事の出願をする

明治四十年（1907）十一月

十二月

前年の出願工事が許可される

明治四十二年（1909）八月

八沢浦の干拓工事が始まる 八沢浦開墾所をつくる港口に出崎式排水機を
備え付け浦の水を流す様にしたが海の波と砂のために埋まってしまつて僅
か三十ヘクタールの田をつくり収穫高は十俵に過ぎなかった

排水機使用を中止、立切海岸につくったトンネルを拡げることになり切り替え
水門をつくる

明治四十三年（1910）

浦口をつくり排水に成功一〇〇ヘクタールの田をつくる 収穫高は四十八
石（百二十俵）だった

明治四十三年（1910）

出崎栄太郎死亡（八月八日午前六時 五十四才 磯の上の墓に葬る）開
拓移住民が住込む

明治四十四年（1911）

出崎猪之助（栄太郎の子）が父の跡を継ぐ 田は百五十ヘクタールとなり
収穫高は四千俵となる 小作戸数八十戸となる 飯の事務所を南海老の星
安蔵方から北海老の磯の上に移す

明治四十五年（1912）

山田茂治（婿）、みさを（翁の長女）が来て干拓事業に従事する
出崎猪之助が新沼干拓に出向く

小作人が山形県・宮城県からも入植する

大正二年（1913）

干拓により灌漑水が不足になったので溜池をつくることにする（鳥喰・鳥啄^{ばく}・勘判^{かんぱん}・石口手^{いしぐち}・日光迫^{ひかりきせ}・滝の沢・坂下の七ヶ所、昭和六年〔1931〕に七ヶ所完成する）

大正四年（1915）

干拓地の周りの岩山を崩し干拓地の中ほどに排水路（川）を造り上げる
記念碑を建立

大正十年（1921）

立切^{たちぎり}・孫目の浦口トンネル水門が波のため砂や石で塞がれることから出崎猪之助の工夫によりサイホンによる

浦口排水を計画する（孫目海岸の浦口より長さ一五〇メートル深さ十三メートル出口の深さ十メートル、直径三メートルのトンネルを海底につける 出口はコンクリートの丸い筒）

大正十三年（1924）

サイホン工事を始める（大正十四年〔1925〕八月に完成見込み）
排水機を電気動力に切り換える 港地区に電気が通ずる

大正十五年（1926） 三月二十五日

サイホン内が砂で詰ってしまったのでこれを取り除く作業をする（人夫八人の内波のため三名が犠牲となる）

昭和二年（1927） 七月

サイホン吐き出し口の蓋がこわれ一気にトンネル内に水が入り八人の命が失われる

昭和三年（1928）四月

八沢浦産業株式会社をつくる

昭和四年（1929）二月

工事犠牲者の慰霊碑を建てる

四月

出崎猪之助死去 山田貞策の銅像を事務所跡に建てる

昭和五年（1930）

サイホン工法が不可になり、船を入れる閘門を巻き上げ式にする

昭和六年（1931）

坂下溜池を大きくする

昭和八年（1933）

区画整理をする 面積三一四ヘクタール、小作戸数一八四戸

（専属小作九五戸 地区在住小作 八九戸）

昭和九年（1934）十一月

山田貞策観菊会（現在の園遊会）に招待される

昭和十年（1935）四月

八沢浦開墾成功記念式施行 記念碑建立

昭和十六年（1941）四月二十三日

皇紀二六〇〇年を記念して元の事務所跡を公園とする

豊受大神を祭神として山田神社を創建

山田茂治干拓地排水施設等を飛鳥組社長に譲る

昭和十八年（1943）

山田貞策の銅像戦時供出

昭和二十年（1945）七月

東北農事株式会社、飛鳥組より干拓関係一斉佐藤貞買取る

十月

農民組合をつくる（組合長 斉藤岩治） 自作農をはじめて設ける（委員

長 佐藤貞）

昭和二十一年（1946）

昭和二十二年（1947）

昭和二十七年（1952）

昭和二十九年（1954）

昭和三十五年（1960）

昭和三十六年（1961）

昭和三十八年（1963）

昭和四十二年（1967）

昭和四十六年（1971）

昭和四十八年（1973）

自作農創設法ができる

農民組合が東北農事株式会社より排水機を買取る

山田神社に玉垣・鳥居をつくる

福島県で八沢浦干拓の排水機や海口水門を修理する

八沢浦に灌漑水路工事完成 記念碑建立

事務所を元八沢浦役場から相馬市蒲庭字孫目に移す
かほに まじめ

山田神社を孫目の事務所隣に移転（山田利貞参拝）

防波用水門三基新設 排水機二台取換え

大排水路の土手嵩上げ工事 長さ一〇〇メートル（一四十八年〔1973〕）

事務所新築

県の工事として排水トンネルとディーゼルエンジンを修理（一五十年

〔1975〕）

海岸保全工事で海の出口の水門を壊し全部動力にする

北屋形で暗渠排水工事をする 広さ四一・二ヘクタール（一五十五年

〔1980〕）

おそにわ 獺庭地区の客土をする 広さ一八・六ヘクタール

昭和五十四年（1979）

昭和五十三年（1978）

昭和五十八年（1983）

昭和六十三年（1988）

平成五年（1993）

県の湛水の防除を八沢地区で実施することに決定する

新八沢排水機場ができる（総工費一九億八〇〇〇万円
最新型横軸斜流ポンプ）

湛水防除工事 八沢地区で開始される

4. 八沢浦干拓



山田貞策翁
(八沢土地改良事務所に掲げられていたもの)



平成五年 八沢浦排水機場竣工記念

八沢干拓の歩み

八沢干拓土地改良区

山田神社遷宮祭執行委員会 刊行



県営湛水防除事業八沢地区概要書

平成五年四月 福島県原町農地事務所編

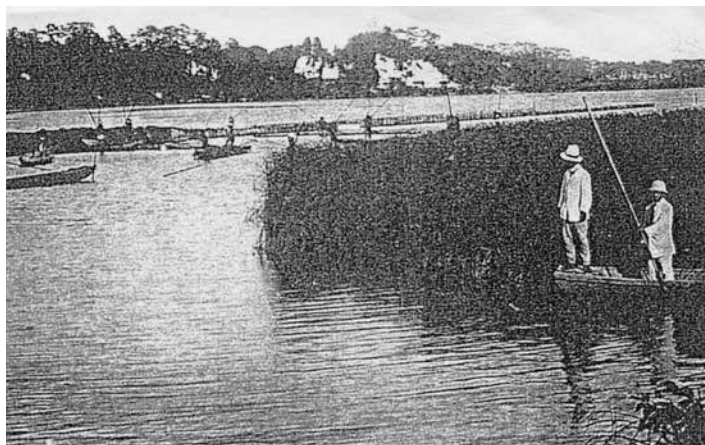
八沢浦の干拓事業（原典は「八沢干拓の歩み」）

明治初め頃の八沢浦

八沢浦はその昔またの名を柚木浦といったこともあり、東西約四キロメートル、南北約二キロメートル、その面積三五〇町歩（三五〇ヘクタール）余、南柚木・北屋形・海老・立切^{たちぎり}・獺庭^{おぞにわ}・柚木が浦に沿う集落であり、太平洋に近接する沼地である。沿岸部では幕末の頃まで製塩業が盛んであった。日照れば千俵の塩ができたと言われ「テツカリ千俵」と称されたという。明治十年（一八七七）の県統計でも海老・北屋形・南柚木三村の塩田は十二町六反（一二・六ヘクタール）に達していたという。水深は深い所で四尺五寸（一三六センチメートル）ほどであり、全体に浅く葦原の沼地で魚介捕りがなされていたに過ぎなかった。だが降雨量が多い時は周辺からの雨水流入により水位が上昇し、耕作や製塩にも大きな影響を与えていた。江戸時代から雨水流入による水位上昇を防止するため海岸の砂礫を掘削して海への排水を何度も試行されるが成功をみていない。明治九年（一八七六）には孫目^{まじめ}海岸の岩壁に中六尺（約一・八メートル）高さ五尺（約一・五メートル）の墜道を掘り排水を計画するも海水波・砂によって破壊している。明治三十四年（一九〇一）には県庁にも働きかけて、排水事業の測量設計を依頼し、鈴木寿三郎・鳥居熊弥両氏の権利取得によって七万円余の事業費で計画されたが、当時の社会情勢など諸事情もからみこの干拓事業は見送りとなってしまった。

山田貞策翁との出会い

養老の山田貞策が遠方の福島県の干拓事業に関係したのはどうしてだろうか。それは大阪岸和田出身の左納栄三郎と懇意にしていたからである。左納は事業家であり排水機販売設置にも関係していた翁とは従前から一緒に仕事をしていたのである。炭鉱経営者でもあった左納は日露戦争（明治三十八年）後の石炭需要の高まりの中で、東北地方に於ける鉱山開発事業のため鹿島町に滞在し調査をしていた。常磐線鹿島駅前の旅館に宿泊した際、ある日館主の中村広吉と八沢浦で船遊びをした。その時八沢浦の過去の干拓の話を知ると同時に広大な広さであり乍ら水深の意外と浅いことを実感した。そして排水機を利用すれば水田化が可能であることを確信し、沿岸近隣の有力者や農民に対し排水機設置を奨めたが、資金面や機械への不安などで賛同が得られなかった。左納は岐阜に戻り、翁に八沢浦の地勢や今までの概要について話すと共に干拓事業推進を強くすすめた。翁は太平洋への排水工事不安や遠距離であることから即答することに躊躇したが、年来の干



工事着工時の八沢浦

拓事業への強い執念から、遂に意を決し、大きな夢を描き左納に案内させて鹿島へ赴いたのである。中村旅館に投宿し、八沢浦の実地調査・関係する人々との懇談を開始した。特に日立木村長・唯野貞太郎、磯部村長・島卯平衡、八沢村長・天野有常、相馬郡長・金指清氏らとの協力懇談、鳥居能弥、鈴木寿三郎氏からの干拓権利移譲などの基本的な事項の獲得に努めた。

かくて明治三十九年（1906）十一月十三日関係する村長各氏との間で干拓事業の契約書を締結するに至った。

八沢浦干拓沿革誌より

契約書

岐阜県養老郡池辺村大字大巻山田貞策ト福島県相馬郡八沢村長天野有常全郡磯部村長嶋卯兵衛全郡日立木村長唯野貞太郎間ニ於テ八沢浦排水事業ニ関スル契約ヲ締結スルコト左ノ如シ

第一条 本企业ノ目的ハ山田貞策ニ於テ福島県相馬郡八沢、日立木、磯部ノ三ヶ村ニ沿接スル八沢浦ト称スル池沼及原野面積凡三百八十町歩（官有地反別三百四十町歩
民有地反別四十町歩）ノ水ヲ海ニ排シ之ヲ水田及塩田トナスニアリ

第二条 山田貞策ハ自費ヲ以テ該池沼ノ一端ニ海面ニ通スル疏水路ヲ開鑿シ更ニ相当ナル方法を以テ干潮時ニ於ケル海水ト池面ノ水準ヲ平行セシメ而シテ其ノ一面ニ出崎式排水機ヲ設置シ水準以下ノ水ヲ排出シ又ハ埋立ヲナスモノトス

第三条 目的場所タル水面ノ内其官有地ニ属スル部分ニ付テハ企業者山田貞策ヨリ当該官庁ニ対シ水面埋立ノ許可
及ビ原野払下ヲ出願スルコト此出願ニ関シテハ三村長ハ企業者ニ対シ充分ノ便宜ヲ与ヘ又事業成功ノ後山田貞策
ニ於テ更ニ其払下ヲ当該官庁ニ申請スル場合ニ於テ前項全様充分ナル便宜ヲ与ヘ決シテ水利上漁業上ニ関シ異議
ヲ唱ヘサルコト

第四条 事業成功後官有地ヲ除キタル尔余ノ土地ニ付テハ八沢村大字南柚ノ木全村大字北海老全村大字北屋形ノ各
所有地反別公簿拾町ニ反拾一步ノ部分ハ金六百六十八円七十八銭四厘ヲ以テ郡参事会ノ許可ヲ得テ売却スルコト
第五条 山田貞策ハ前二条ニヨリ目的地全部其所有ニ帰シタル時ハ水田ハ其十分ノ五塩田ハ十分ノ二ヲ限度トシテ
自作地ヲ五ヶ字ニ於テ成功反別ニ応シ撰定シ尔余ノ土地ハ之ヲ左記ノ方法ヲ以テ八沢村大字南柚ノ木磯部村大字
蒲庭ニ永小作権ヲ設定スルコトヲ約ス

一、存続期間ハ五ヶ年トス但シ満了ノ時ハ更新スルコトアルヘシ

二、小作料ハ水田ニ付テハ收穫ノ十分ノ四ヲ支払フコト塩田ニ付テハ毎年度製塩売却代金（総収入）ノ十分ノ二
ニ当ル金額ヲ毎月末日支払フモノトス

三、小作人ハ水田ハ一ヶ年塩田ハ一ヶ月タリトモ右小作料ヲ不納シタル時ハ其永小作ノ權利を失フモノトス

第六条 事業成功後ニ於ケル目的地ノ悪水排除塩水灌漑ニ関スル諸費ハ小作人一ヶ年一反歩ニ対シ金五拾銭ヲ小作
人ニ於テ負担スルモトス

第七条 山田貞策ハ此契約成立後直チニ工事ニ関スル一切ノ設計ニ着手シ其結了ノ上其筋ヨリ工事着手許可ノ上ハ

更ニ詳細ナル本契約ヲ締結スルモノトス

第八条 該排水事業ニ関シテハ三ヶ村共水利上漁獵上等ニ関シ他村ト慣行盟約等無之コト

第九条 三ヶ村長ハ此契約ニ違背シタル時ハ山田貞策ニ対シ各關係大字ニ於テ損害実費ヲ連帶シテ賠償セシメ且將來山田貞策ノ承諾ヲ得ルニ非サレバ自ラ該開墾ヲナサズ又他人ヨリ出願スルコトアルモ之ニ全意セザルコト山田貞策ニ於テハ明治三十九年十二月一日ヨリ向フ二ヶ月以内ニ工事ノ設計ニ着手シ其筋へ出願許可ヲ受ケタル日ヨリ向フ五ヶ年間ニ工事ヲ成効セシムルモノトス若シ期日遅延シタル時ハ此契約ハ無効トス 但天災事変若クハ避クベカラザル事情ノ為メ遅延シタル時ハ此限りニアラズ

右之通り契約候処相違無之仍テ本証四通ヲ作り各其一通ヲ所持スルモノナリ

明治三十九年十一月十三日

岐阜県養老郡池辺村 山田貞策

福島県相馬郡八沢村長 天野有常

全県全郡日立木村長 唯野真太郎

全県全郡磯部村長 島 卯兵衛

契約ノ変更并ニ追加契約証

明治三十九年十一月十三日付ヲ以テ山田貞策ト八沢村長天野有常日立木村長唯野真太郎磯部村長島卯兵衛ニ於テ締結シタル八沢浦開墾事業ニ付キ契約中第四条事業成功後トアルヲ事業着手後ト変更スルコト及ビ全条ニ左ノ但書ヲ加フル事

但本契約書第九条ノ期限内ニ事業成功セサル時ハ本条ニヨリ売買済ノ土地ヲ山田貞策ハ買受ケ元価ニテ元地主各大字ニ売戻シ登記ヲ履行スルコトヲ特約ス

右承認致候也

明治四十一年二月二十五日

美濃養老郡池辺村大字大巻五千三百五十九番地 山田貞策

相馬郡八沢村長 田原口忠治

全 日立木村長 唯野真太郎

全 磯部村長 嶋卯兵衛

漁業権

契約証

福島県相馬郡八沢浦漁業権ノ儀今回手当金五拾円ニテ貴殿ニ譲渡ノ契約相整候処確實也 然ル上ハ今後該浦漁業権ハ貴殿ノ御心俣ニ御処置相成候共沿岸漁業者一切異議申上間敷候 尤モ從來ノ漁業者別記ノ者ニ限り今後拾五ケ年間無料ニテ漁業可致儀ハ御承諾被下度候 為後日契約証仍而如件 尚開墾ニ防害アラザル様漁業可致事 但前文十五ケ年内ト雖モ貴殿ニ於テ協議ノ上該浦ニ養魚場御設備相成候節ハ異議ナク協議ニ応スベク事

明治四十五年三月

福島県相馬郡八沢浦

漁業組合理事 郡 助三郎

全 幹事 志賀宇嘉治

全 総代 田入卯之助

全県全郡全村大字北屋形

保証人 上田喜三郎

山田貞策殿

農地を造成するには通常山林原野の木を伐採し土を掘り運んで田畑にするのが開墾であり、池や沼を埋めて農地にすることを埋立と云う。又多数の人間が移住して広い土地を開墾することを開拓と称したが八沢浦の場合は土を掘り返すのでもなく土を運んで埋め立てるのでもなく、工事が完成すれば多数の耕作民を必要とするので開拓とするのも当を得ないといっているので農商務省もその表現に苦慮したが「干拓」とし水を干してその後を拓くの意味をもつ公用語とされた。

明治四十年十二月九日名実共に八沢浦干拓事業の幕が切つて落されたのである
翁が起業に当り当初の経費として次のように予算を計画した

総額金十三万二千二百円也

一、四万二千六百六十二円

蒸気汽罐排水機据付一式費

一、七千九百円

官有地買入代

一、四千三百円

事務所改築及倉庫移民住宅費

一、三千六百円

事務所賄費旅費及手当金

一、八千二百円

田畑開墾及耕起肥料代

一、三千二百円

調査測量出願費

一、三千九百六十円

農具家具備品種苗代

一、一千三百五十八円

浦口浚渫及雜貨

一、六千八百円

移住民対策費

一、一万円

埋立式

一、二千二百円

鉄索費

一、六千八百円

耕地通水路・その他

一、三千五百円

監督費

一、六千二百八十二円

住宅・倉庫建築費

一、二千円

予備費

であつた。当時の一般人夫賃金は一日三十銭の時で排水機据付が一台三千円の大金を要する仕事で、翁の資力が強大であることが推察される。

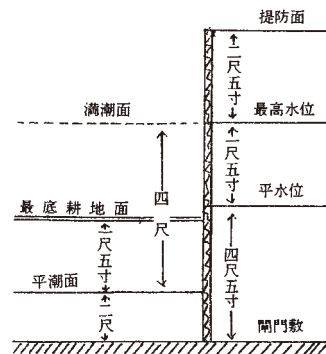
又当時明治維新後三十余年、東北の地に関西の人が突然来たり古来希れる干拓事業を興すということは驚きであるのに先祖代々より朝夕生活の場として来た八沢浦を売却する等、農民にとって正に青天の霹靂であり、沿岸三ヶ村長及び沿岸住民との協議、漁業組合との補償、又県庁郡役所、農商務省等々との種々の交渉協議を幾度となく重ね乍ら、創業に漕ぎ附けられた努力は容易ならざるものであつたと考えられる。誠に翁の識見の卓抜たること、豪胆にして緻密、そして不撓不屈の精神は驚異の一言に尽るのみであつた。

更に精査測量のため仙台より須藤某という技師を雇入れて実測の結果、
 全体面積が三百五十二町歩七反一畝とされた。

矢の目川上流に堰を築きそれにつなげて幹線排水路を造成し、河口近くの
 排水機場へ悪水を集め六五〇メートルの潮遊び水路と一四〇メートルほどの
 の隧道との二本で太平洋へ排水するものである。また干拓地中央部左岸に
 は七ヘクタールほどの遊水調整池を作るとともに、途中には用排水調整用
 の樋門・水門・暗渠なども設置した。自然排水については下の図の様に海
 底より三尺五寸（約一メートル）の高さを干拓耕地の最低地として、干潮時の一尺五寸（約四五センチメートル）差
 を利用して閘門より太平洋に排水するものである。

八沢浦干拓事業最大の施設で有り且つ事業の成否がかかっている排水機については美濃地方輪中の排水に最大効果を
 を發揮し地域農民の衆望を担った画期的な文明の利器であった。

この排水機については翁が大阪岸和田から優秀な技術者・出崎栄太郎を大巻に招き輪中地帯に於ける排水機製作に
 挑戦させた。一五年の歳月をかけて工夫に工夫を重ね考案したのが水車式排水機で我が国で最初のものであった。こ
 の排水機は直径四・六メートル巾二・五メートルの鉄板製水車一基を二十五馬力のコールドニッシュ式蒸気汽罐による原
 動力で以て運転する装置であった。排水田面積五十ヘクタールの水を九十センチメートルの高所にある棄水池に一昼

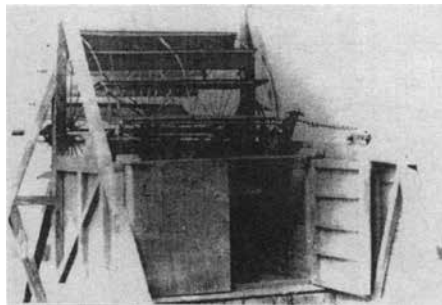


潮位と閘門敷高の関係図

八沢干拓土地改良区、山田神社遷宮祭執行委員
 会 1993『八沢干拓の歩み』より

夜に約四十二万石の水を排水する能力があった。この運転経費は一ケ年の運転日数を十昼夜として約百五十円で、これは水害の年でも平年作並の十アール当り二石二斗（約三百五十キログラム）を上げることができたものであつて、これが複式のものに改造され西南濃地方で活用され自信を持つていたのである。因みに八沢浦干拓工事を始める二年前には出崎をチーフ指導者として出崎式排水機製作会社を興しその製作改良に取り組んでいたのである。

翁は出崎栄太郎を伴い明治三十九年（1906）十二月八沢浦に第一号排水機を設置したのである。その一号機は出崎式排水機径三呎（約九十センチメートル）気罐コルニツシュ式径三呎六吋（約百五センチメートル）十六馬力汽機單式高圧気筒九呎（約二・七メートル）一台であつた。これによつて明治四十一年（1908）春初めて三十ヘクタールの水田に水稻を植え付けることができ、干拓の第一歩の成果をみることができた。昨年まで一面の湖水の中に忽然として黒々とした沃田が出現し沿岸農民も排水機の威力に二、三年先には三百町歩の田園が忽ち仕上がり稲穂波打つ美田が見られるものと信じ歓喜に吾を忘れる有様で大いに前途に望みを持つに至つたのである。しかし乍ら、その年の七月になると港口の吐き出し水門が海より押し寄せる漂砂のため埋没閉塞し放水路も同様砂山と化し再参の掘削作業に当るも一朝激浪有れば忽ち旧に復し僅かの人力と大洋との根比べとなり遂には海水の浦内への逆流する処となり折角の稲も枯死して三十町歩の田よりたつた十俵の収穫に終つたのである。

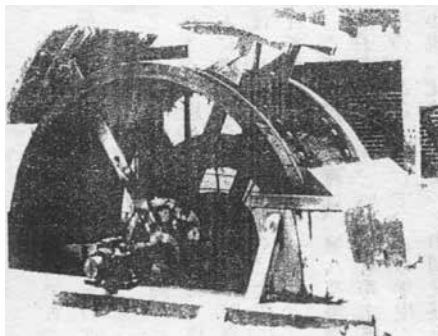


初期の木製出崎式排水機

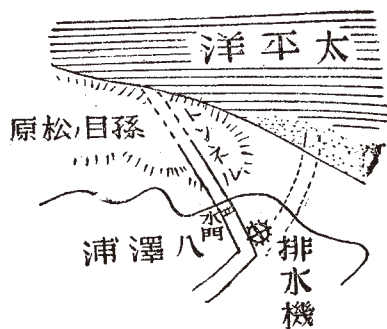
一方資金面に於ても既に六万円を投じて居り今後の工事負担にも容易ならざる事態に立ち至りたまたま左納栄三郎の尽力により勸業銀行より融資の途が開かれて金貳万円を借用し更に強力なる排水機の据付を考え百五十馬力平置蒸気タービン機関ポンプで性能も一段と強力となり毎分四十四回転して吐出水量も十倍となり関係者の期待を担って翁は更に四万円の資金借入をなして、第二期工事に当たりボイラーの基礎は煉瓦を積み上げて固め巨大なる缶体と排水機の偉容には事業の成功も確実なるものと信じて益々工事に精出して一日も早い成果を期待したのである。

これを受けて出崎栄太郎も息子の猪之助を督励し實地に鑄造工作に当った大阪の川崎鉄工所との間を何回も往き来し乍ら細心の注意を払いやが上にも慎重を重ねて自らが心血を注いで開発した平置式タービンポンプの据付け工事を終えていよいよ試運転の当日となり翁を始め工事に従事する者や耕作民多数かたづをのみ、心を躍らせて火入れをして起動操作をするも一向に回転が挙がらずゴトゴトと四・五回音と共に廻ったにすぎず、遂に停止してしまい散々な結果となってしまった。それより毎日の如く出崎父子がポンプと取り組んで分解しては組み立て火を燃やしては、を幾度も試すもいかんともし難く出崎の落胆は人目も驚く程であった。人一倍責任感の強い氏は多額の資金を投じ乍ら一向に不首尾に終った事で一身に背負って悲嘆の余り病床に伏し枕も上がらぬ身となってしまうたのである。

此処に到り、到底人力にては排水は不能なりとして事業廃止の窮境に陥り前途



初期の出崎式蒸気タービン排水機



出崎榮太郎が考えたトンネル式の排水計画

沖野岩三郎 1943『八沢浦物語』より

に光明なき暗澹たる悲しみと茫然自失するに到りしも勇猛なる翁は再び勇を鼓して所員と共に寢食を忘れ現状打開に一大の心渾を尽くして最善の策を講ずべく奮励努力した次第である。

此の大事業の工事の総責任者である出崎榮太郎が病篤くなり猪之助が父に代わって重責を負うことになった。毎日の如く海岸に立ち良き方法をと苦慮していたが、かつて左納栄三郎がはじめて八沢浦に船を浮べた折に中村広吉が「昔、浦の水をトンネルより吐出さしめた事が有った」と語ったことが思い出され、そのまゝに廃棄されている形跡があると附近住民より聞知するや早速調査にかかった。即ち浦口北磯に当って水路上に少隧道を穿った跡の発見につとめたが何分立切の海岸壁は高さ二十間程の岩壁で人を寄せ付けない険しさで容易に見極めることが出来なかった。

が丁度やって来た左納にこのことを話すと、大阪岸和田の海岸育ちの氏は立切岩壁より海に飛び込んで磯の下部を調べると海面の波間に見えかくれする位の処に岩穴跡が発見された。だが砂礫が一杯詰っていたのである。

直ちに此の旧隧道の拡中と、そこに到る水路の修復を思い立ち改修すれば浦内排水はできるとして勇気を盛り立て作業に当り約二ヶ月の末忽然として大穴を掘削することができた。此の隧道工事は明治四十二年八月に始まり四十三年二月二十三日に到り通水式を挙げ、予期の効果を奏しこの年には新たに約百町歩の植付を見ることが出来た。通水当日水門を開けると滞留していた浦水はどつと音を立て乍ら流出する水勢に多年の辛酸が一気に流し去られるかに、見

る見る内に湖面が黒く露呈する様子に手を取り合つて喜びの涙を流したのである。

病に伏していた栄太郎は此の隧道の海岸口を、大洋の荒波に如何に対処するか、猪之助と工夫計画をめぐらしていた。その結論として、岩壁出口に頑固なるコンクリート石積みみの壁体を廻らして直接に波浪の激突を避け乍ら且つ又砂礫の浸入を防止して吐出せしめこの堤防壁体に捲き上げ式の水門を設けて排出せしめるものとしたのである。海を相手の工事のため至難を極め乍らようやく完成したのである。他方干陸せる浦内も耕地整理が進み約百三十町歩の区画割りが出来、大至急に近隣より稲苗を求めて植付けをなし夏には百町歩の青々とした水田を眺めることができたのである。

八沢浦干拓に手を染めて以来五ヶ年の歳月が過ぎ去り言語に絶する辛苦を重ね乍ら干拓の曙光を見出したのである。然し乍ら此の夏八月八日出崎栄太郎は大阪泉州の地より東北相馬に来て、翁と共に誰も経験したことのない干拓事業に従事し、五ヶ年に亘る失敗の連続と戦い、生涯の仕事として開発研究に心血を捧げた。タービン排水機の無惨な敗北により病を得て、他界し異郷の地に骨を埋めることになったのである。享年未だ五十四才であつた。八沢干拓の第一の犠牲者として静かに世を去り、翁は之を篤く哀んで八沢浦を一望出来る磯の上の地に葬つたのである。

創業以来五年の年月を経て百三十町歩の水田を得ることが出来、この年には千四百俵の米の収穫を得ることが出来た。だがこれは本来ならば五千俵は取れる見込であつたが、新田には自然の肥沃分が多い故か又は塩分土壤の故かこの解決には思案に暮れるところであつた。この時に杉山元治郎という農業技師に出会つたのである。翁は第二期工事

の発足に当り非常事態打開のために自らを厳しく律するため禁酒禁煙を表明し、それ以来、毎日曜日は中村や原町遠くは小高町にまで足を延ばして教会を訪れ精神講話会に臨み、心の安らぎを求め事業推進の心の糧としていた。時々小高町に行った時、焼き芋屋の看板の有る陋屋より讚美歌が流れていた。入って初対面の挨拶した牧師が杉山元治郎だった。氏は左納栄三郎の故郷岸和田の隣地佐野の出身で大阪天王寺農業学校を卒業し和歌山県の農会技手となり明治三十七年に退き仙台の東北学院に入り神学を学び牧師となつて東北各地に農民伝道に携わる傍ら農業技術を教え、肥料農具の販売をしていたのである。翁は他から援助を受けることなく自力で神の教えを説いていることに感激し、八沢浦干拓の事を話し農民の指導と農耕技術の教育を仰いだのである。翁は早速猪之助にこのことを話し明治四十四年（1911）に磯の上の事務所の顧問として迎え、干拓事業推進に良き協力者を得ることができたのである。氏は入植農民と集会所にて米作りの要領を教え、又キリスト教の精神を説いて農民の良き相談相手ともなり、秋の収穫期には産米の品評会を開き審査員を務め、又農民と酒食を共にし歌い踊り会つて、日々の烈しい労働の農民にとって無上の楽しみであつたと伝えられている。

又氏は広い干拓地を利用する一方法として一番低い地を選んで池を掘り養鰻をすゝめ、養魚会社を作り一応の成果をみたのであるが一夜の大洪水によつて一匹残らず逃散してしまい、閉鎖することになってしまった。今も「会社会社」と地域の人が呼び習わしている池跡が残存しているとか。

第二期工事も略完工し開田面積も百五十町歩を算し、小作人も諸方より入植し産米も四千俵に達するに到つたがまだ普通の半分の収量に止まっていた。農耕の面には杉山の指導を仰ぎ工事面は翁が担当し工事の進展に努めたが緊急

解決しなければならぬことは海口閘門の完全を期することであつた。海潮の逆流による浦内浸入による水稻枯死、時として大浪による扉門の破損による潮害などその対策に悩まされていた。

が翁は近隣相馬の新沼浦の開発干拓に着手する計画をたて、その組織を会社制とし広く出資を求めた。この第二の干拓事業に八沢浦の技術を活用すべくその現場総監督として出崎猪之助を赴任せしめ開発を進めることにした。その後任として翁は女賀の山田茂治を呼び寄せ八沢浦干拓の総責任者としたのである。氏は農業大学卒業の農業博士で卒業後直ちに八沢の現場に着任し、新進気鋭若き情熱をもって現場の指導にあたることになった。以降氏は昭和十六年（1941）までこの事業を継続指導したのである。

こうした並々ならぬ努力と実績により明治四十三年（1910）十二月に耕地整理事業として県より補助を受けることになり総額六万九千円余の予算化がなされた。

工事予算 六万六千六百二十八円六十八錢五厘

内訳 一、三千九十三円四十九錢六厘 道路費

一、二万五千四百三円八十六錢貳厘 堤塘及水路費

一、七百三十二円六十五錢五厘 畦畔築立費

一、五千百八十三円五十錢 地盤切均費

一、一千三十三円十七錢九厘 棚土費

一、二百五十七円三十六銭

水拔新設費

一、一千百六十一円五十六銭八厘

海口閘門費

一、二千百五十七円七十五銭八厘

樋管費

一、四千六百二十二円十二銭五厘

伏越樋管費

一、一千二十六円八銭五厘

橋梁費

一、二千四百九十円

揚水機船費

一、六百三十七円七十一銭

繫船樋門費

一、九千九百七円五十三銭四厘

排水機及附属物費

一、二千四百七十六円五十九銭

隧道堀鑿費

一、四千二百七十一円七十四銭五厘

閘門増設費（追加分）

一、二千百七十三円五十一銭

地区外溜池新設費

事務費 三千円

内訳 一、一千円

雜費（追加）

一、二千円

報酬及旅費（追加）

合計 六万九千六百二十八円六十八銭五厘

翁にとつて長引く難工事で借財も増加している中でこの県費補助は何よりの励みであつたが翁の政治的手腕も見逃せないものであつた。

一、堤塘水路の主なもの中央幹線排水路上流の地区境より排水機場に到る総延長千六百九拾間 更に左右岸に副排水路を並行せしめる、など

一、橋梁としては上流矢の目川添より前日向堤内に通ずる農道橋 外四つの橋を架設し地域内農耕の便宜を計り併せて町と村との連絡道として社会生活の至便を図る

一、潮遊び水路の開削については排水機場より海口閘門上部の排水隧道に到る三百間の排水路について外海の荒天の折の波浪の余波の水田に流入することを防止するためのもの

一、洪水調整池及地区外溜池の構築について 開田面積の拡大について用水不足の対策も必要となり七ヶ所の溜池を構築し、干拓農民の農業経営基礎を確固とするものである

入植農民の募集と小作制度

明治四十四年（1911）認可となつた耕地整理事業の進展に伴い農耕田の規模も整備され小作を希望する入植者が隣接町村は勿論遠くは山梨・愛知・山形・宮城県等より来て耕作に従事した。その戸数は百戸以上にもなり開田面積も二百五十町歩を算えることとなつた。

これ迄小作人の生活待遇等は甚しく最低劣悪の環境の中に生計を続けていた。住宅とは名ばかりで雨露をしのぶばかりの棟割長屋、主食は僅かの労賃に代る現物給与の麦八分の米、風呂・便所は共同で夜露に曝され星空を眺め乍ら浸っている始末で生活必需品から学用品まで、開墾事務所より支給されていた。そして移住者を班単位に編成し、事務所の指揮下に於て凡てに服従される機構であった。即ち小作人の収入、賃金はすべて地主側に掌握されてをり、苛酷な小作制度のもとにおかれていたのである。中には折角入植したが他所へ夜逃げ同然退散した家族もあり、いかに小作人の生活が悲惨であつたか今の世の語り草となっていることもある。

そしてその長屋は排水路口附近にあつて朝夕、雨の夜も台風の折も地主の命令の下スコップを手に砂に埋った水路を開削し、腰に命綱を巻いて強風激浪の暗夜、文字通り命がけで海口閘門の開閉に従つたものである。

小作制度は次の様であつた

一、小作料は収穫米の半額となす。但し一反歩につき一石二斗以上を超過せざるものとす。収穫期に於て干拓事務所員及小作人代表者立会の上検見又は坪刈等の方法に依り協定す。

一、納入小作米に対しては合格等級に応じ賞与を支給し其半額は強制貯金として共栄組合に貯金せしめ又この貯金の二割に相当する金額を事務所より更に共栄組合に寄附貯金し如何なる理由あるも個人に使用することを許さず。但し各小作人一名に対し金五拾円に達したる時は貯金の義務を有せざるものとす。

一、移民部落を四区に分ち各部に伍長一名を選任し部落統制の任に当らしむ。

一、毎月二回（一日と十六日）を会計日と定め労働賃金の支払をなし終つて事務所楼上に於て精神修養会を開く。

一、毎年一回稲作多収穫品評会を開き賞品を授与し且つ精農者を表彰す。賞品授与式当日は県郡農会等より技術員の臨場を請い農事講話をなす。

一、貯金は当開墾所に於て定むるところの貯金規定に基き労賃の百分の四を小作人に強制的貯金をなさしめる。

一、昭和七年（1932）度より共同経営部を設置し事務所自ら主宰となり小作人の労力過剰なる者を使用し一定の日給を支払い予定の収穫以上利益金は主宰者小作人と半額宛分配するものとす。但し昭和九年度は共同経営面積は約水田貳拾町歩を植付けたり。

積立金規定

第一条 八沢浦干拓地農民は当事務所より命ずる金額を必ず事務所に積立つる義務を有す。

第二条 積立金は事務所主任が積立人に必要と認むる場合の他払戻しの請求に応ぜず。

第三条 積立人は左の場合に限り積立金払戻の権利を失う

1、積立人が事務所の意志に違反し他に移住したる時

2、積立人が疾病を除く自己の都合に依り事務所の農業又は労役に従事せざるに至りし場合

第四条 積立金は其初回に通帳を渡し以後は主任の認印を以て預金の証とす

第五条 積立金の権利は相続に因り移転する外之を他人に譲与することを得ず

移住民招致方法

開墾所移住者規則

- 一、当開墾地の移住者は総計百余名にして毎年若干名を募集す
- 一、移住者は妻帯せる丁年以上の者にして品行方正勤勉なる農業者に限る
- 一、特別の理由あるものは妻帯者にあらざるも許すことあるべし
- 一、移住者は原籍町村長の身分証明書を要す
- 一、確実なる保証人二名を要す
- 一、移住者は普通労働に耐ゆる者一名に対し水田一町歩以上を小作せしむ
- 一、年賦償還其他の方法により移住者に宅地及小作地を譲渡し移住者として漸次自作農たらしむ
- 一、移住者の小作料は収穫の半分とす
- 一、移住者の旅費は特別の場合を除く外自弁とす
- 一、小作地に施す肥料は当分貸与す
- 一、移住者の戸別割に依る諸税は移住の初年に限り当事務所に於て之を支弁す
- 一、移住者は当事務所に於て規定せる諸規則を厳守するものとす

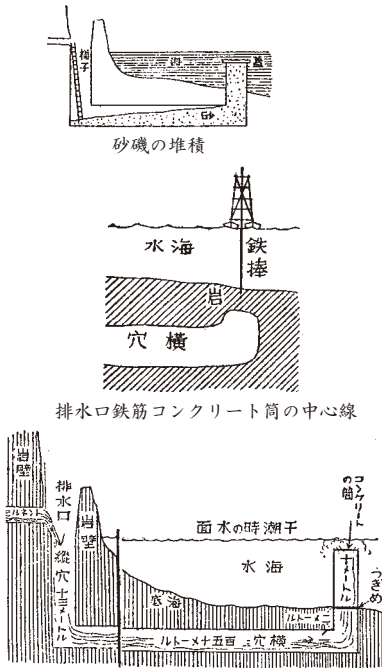
此の外、小作人の生活と農耕上の物資の販売購買及労務賃金の貯金預入奨励や生業資金の貸付を計画して有限責任

八沢浦信用購買販売組合を組織していた。

三十年近くに及ぶこの大事業にはかなりの借財もかさみ翁の命を受けた茂治は以上の様な詳細な規則を他にも細かく作り入所小作人よりの反発もかなりあったようである。しかし無一文で入植した小作人たちは歯を喰いしばって身を削る努力を続けて来たのである。

干拓地内に溜池の構築と中央部に排水路の設置によつて稲付け面積も増えて来たが一番の課題は海口閘門の開閉であつた。太平洋の激浪にさらされると閘門の開閉が不可能となりまた砂礫が堆積して海がおさまっても排水がまゝならなかつた。

そこで猪之助は奇抜なことを考えた。即ち何時如何なるときも波浪堆砂の影響をうけない方法としてサイホン式排水口と称し、閘門前の隧道出口より直径三メートルの広さと深さ十三メートルの縦穴を掘りそこから巾三メートルの横坑として長さ百五十メートルの海底トンネルを掘り進み沖合に到つてそこより海中に煙突のように鉄筋コンクリートの円筒を据置してそこから海中に内水位と



海底サイホン式排水坑図
山田神社遺宮祭執行委員会 1993『八沢干拓の歩み』より

外水位との水位差により自然排水が出来るように設計したのである。この工法は排水としては当時としてはまだ世界に例を見ない画期的な計画で有った。直ちに工事請負に入ったが海底掘削という難工事で永続きせず山田氏が直接施工することになった。海底隧道に入ると頭上の岩盤を通して波動により転々とする砂礫の音が坑内に響き渡り、人夫が恐れおののいて一向に工事が進まないのも当然であったが、茂治は八沢干拓の最大にして最後の難事業として干拓の成否をこの海底トンネルにすべてを賭けていたのである。

大正十三年（1924）九月に着工し約一年後の大正十四年（1925）八月にようやく完工したのである。勿論海底トンネル故工事費は陸上でのそれとは到底比ではなかったが、いざ吐出口の鉄筋コンクリート円筒を据えることになり、更に難行苦心して考えたのは船をトンネル出口のあたりに浮べてそれより鉄棒を降ろし、海底の岩を突通して海底トンネルの位置をさぐり当て之を中心に円筒を据えて穴を貫通せしめたのである。いよいよ工事が完成し翁を始め人夫多数が見守る中に縦穴入口の仮メ切口を開けると浦水は音を立て乍ら穴に吸い込まれる水勢は飛瀑のごとき態をなし、沖の排水筒口からもくもくと赤茶けた泥水が木片や松葉枝と一緒に吹き上げるさまに一同は手を打ち足を鳴らして喜び一年間の危険作業の労苦を報われたのである。

これよりは水門は波浪による故障に悩まれることもなく排水筒からは絶えずくもくと悪水が吐き出されて浦内水位も下り到底機械排水の及ぶところではなかった。従って浦内の干陸も一挙に進み、その年は大豊作で小作人は大いに助かり前途を祝したのであったが同年十二月になると海潮の変化により海中の吐出筒口より砂が大量に坑内に堆積し、やがて二ヶ月も経つ内に砂は坑内を埋めどうすることも出来ず、三月二十四日の午後人夫七名、縦穴に入って見

ると砂は横穴より出口に向かって斜めに堆積し海中吐出筒の下まで続き、そこからは海水がぼたりぼたりと滴りていて危険を感じる状態で縦穴の入口に入坑禁ずと大書し善後策をとることにした。翌三月二十五日は人夫全員の休日であつたが縦穴の除砂に入つた人夫三名が痛ましい犠牲になつてしまつた。翁らはこの日所用で他出してをり三名の人夫は危険を顧みず事業の膠着を憂いてサイホンの砂を少しでも除いてとする一念であつたろう。

孫目海岸に宇都宮清三郎（39才）佐藤一郎（22才）前川長命（36才）の三名、不幸にも砂を掘っている内に海水の圧力にて砂と海水が一時に落下し入口立杭下まで吹き上げられてしまつたのである。明治三十九年（1906）干拓に着手以来初めての尊い人柱として、干拓地の住民は勿論のこと近隣村落に哀惜の声が満ち、翁を始め責任者の落胆は筆舌に尽し難きものであつた。その後はサイホンは砂が抜け落ちたせいか旧に復して、又もくもくと絶えず水を吐き出しているので一応の安堵を得たのである。此の年の暮れ十二月二十五日に大正天皇の崩御により昭和となり世情も一新されて干拓に従事する耕作民も一日も早い完成を願ひ工事進展に意欲を燃やしていた。時すゝみ昭和二年（1927）六月に又々サイホンよりの排水が不良となりやはり吐出口より砂が浸入し堆積によるものであつた。

翁らは前年の失敗を考えこのサイホンを廃止しべく出崎と協議の結果、除砂作業の危険は詰つた砂と海水が一時にサイホン内に流れ込むからであり之を防止するには吐出筒口に蓋をすればよいとなつて、直径三メートル厚さ十センチメートルの松板の上に土俵を置き、鉄線で縛り固定することにした。その上坑内の海水をポンプで取り出し砂出しを行うことにした。

仕事は早急に進められていったが、昭和二年七月三十日この蓋が一気に破れ、一大轟音と共に海水が雪崩れ入り吹

き飛ばされて入坑中の入夫八名が又々第二の犠牲者となり、唯一名のみ奇跡的に助かる事故になってしまった。前回にもまして浦内には朝夕悲嘆の悲しみが満ちて、且つ又広く世間からも厚き同情が寄せられたのである。

未だ人生僅か二十代から四十代そこそこの一家の柱たる人々を失い残された家族の悲嘆はどうい云い表せるものではなかった。殊に前年の事故で亡くなった宇都宮清三郎の実弟栄一（27才）は兄弟二人して八沢干拓の礎石となった。その他上谷地武（38才）小泉亀松（23才）相良亀治郎（37才）大久幸記（24才）荒運記（25才）今野善助（43才）渡部冬治（34才）であり、さしもの豪気の翁も度重なる大惨事に落胆極まり干拓の中止をも考えざるに至ったことも事実であり此等の対策は誠に容易でなかったであろう。補償として上面田一反歩をその家族に小作料免除として贈り昭和四年磯の上公園にその慰霊殿を造り、更に山田家の墓地に供養石碑を建立しその霊を弔ったのである。

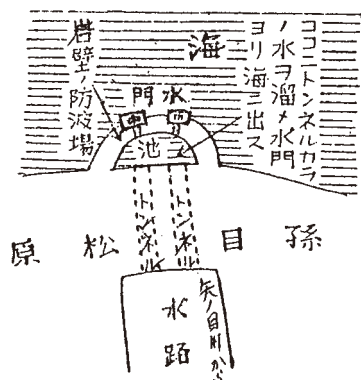
又悲しいことに昭和四年四月二十六日出崎猪之助が中村の自宅で息を引き取ったのである。氏は幼くして父と共に八沢浦に来て、父と共に洪水と斗い激浪に身をさらして、翁の良き相談者となり八沢干拓を仕上げに生涯を投じた一人として、父及びサイホンで犠牲となった十一名の人々と共に八沢干拓の成功を念じて世を去ったのである。前年八月自己が考案した海底サイホンのため十一名の犠牲者を出した責任を痛感して、その直後に病を得て床に着き遂に父の跡を追ったのである。斯様に干拓事業の内に最も多事多難の時であり、尊い幾多の人命を失い乍ら辛苦に堪えようやく事業も第三期の終わりに到り、痛恨のおもいの中でサイホン式排水事業を断念することにしたのである。開墾事務所も磯の上にあったが、不便のため排水機隣りに移転した。又大正十三年（1924）にはじめて高圧送電線が架

設されて港部落に文明の所産である待望の電灯が灯ったのである。

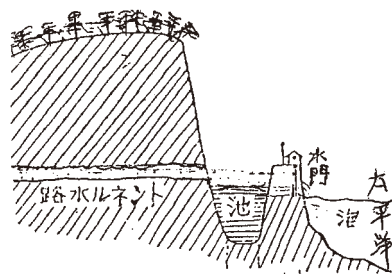
幾多の困難を乗り越えて昭和三年（1928）には干拓事業にもようやく明るさが見出せた。翁は資本金一〇万円にて八沢浦産業株式会社を設立し、強力な排水機の導入など農場経営も本格化することになった。昭和四年（1929）には捲き上げ式の海口閘門とすることに決め、太平洋への排水工事に着手したのである。

小高い孫目松原海岸の下に掘られていたトンネルを活用した海口閘門を全面的に大改修し海への排水がスムーズにできるようにしたのである。

工事内容は図の様に八沢浦干拓地に流水する矢の目川を経て中央水路からの悪水をトンネルを通して排水するものである。トンネル出口の海岸岩壁を削り大きな縦穴を掘って貯水池としたのである。また貯水池排水面には大型モーターポンプを設置し、常時排水できるようになったのである。特に太平洋の荒波にも耐え得る頑強な水門の製作が必要であった。水門の桁や戸当り、基礎部分は加工した御影石を積み重ねて堅固にし、水門扉は厚さ三寸五分（約一〇・五センチメートル）の樺板を使用し御影石の大きな枠に嵌め込み、手動式ではあるが上下に動かす方式をとって海への排水を行うことができるようになったのである。

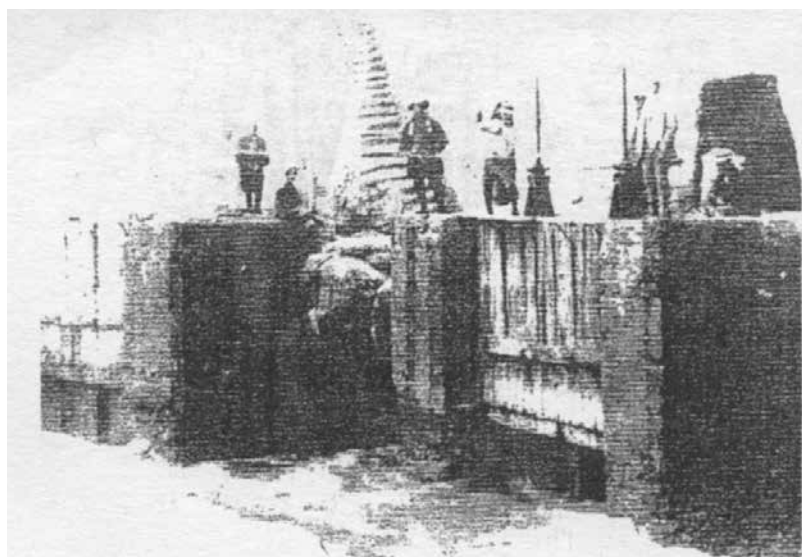


海口開門略図



海口開門断面図

八沢千拓土地改良区、山田神社遷宮祭執行委員会 1993『八沢千拓の歩み』より



当初の海口開門

大正三年（1924）にはこの港地区にも電気が通ることになり、その後は翁が依頼して製作させた出崎式蒸気排水機に代わり、国内有数のメーカー製作の電動式モーターによる排水機の導入に踏み切っていくことになった。例えば西島製作所の径二十四吋（約六一センチ）型複吸水ヒールポンプ揚程六尺二寸（約一・八メートル） 下水面距離五尺（約一・五メートル） 管内損失水頭一尺二寸（約三六センチ） 毎秒揚水量〇・五屯 毎分軸回転数一九五回転、原動機として五〇馬力モーターの二機、また昭和三年（1928）には佳原製作所の模型軸一一五〇耗可動翼式ポンプ、全揚程五呎（約一・五メートル） 揚水量毎分八二立方呎（約二五立方メートル） 回転数二二五回転、高圧七五馬力モーターの二機を導入するなど電動化が進められていった。反面資本投資もかさんでいったのである。

こうした多くの犠牲と莫大な資本の投入による排水工事もようやく完成し、昭和八年（1933）には八沢浦干拓地の区画整理も一応終了することになった。

明治四一年（1908）に三〇町歩（三〇ヘクタール）の水田化から数えて二十六年目八沢浦総面積三五二町歩（三五二ヘクタール）のうち九〇パーセントにあたる三一四町五反七畝八歩（約三二四・六ヘクタール）が水田となったのである。この水田耕作などに遠くは愛知県からも移住者が入るなど専属小作九五戸 地区在住小作八九戸 計一八四戸の小作農家になったのである。

明治三十九年（1906）に干拓の計画を立て、より二十七ヶ年毎年暗中模索を続けながら幾多の災害と闘い十一名の工事犠牲者を出し昭和十年（1935）開拓成功の祝をすることができたのである。例えば明治四十二年（1909）初めて八沢浦より米四石が収穫されて以来、昭和九年（1934）には五千八百九十六俵の増収を見る

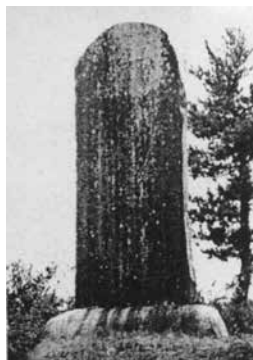
ことができたのである。二十七年の年月を経て一千四百七十四倍の米が血と汗と巨額費を投じた賜であり、人間の力の偉大に唯々敬服あるのみである。

翁の功績は永遠に不滅の偉業として後世に残すべきものとして耕作農民の間より声が起こり広く浄財を募り①昭和三年（1928）に八沢干拓を一望する磯の上の翁の居宅跡を整備して公園としてその地に等身大の寿像を鑄てその徳を偲び報恩の一端としたのである。（昭和十八年〔1943〕戦時金属物資報国のため応召され石柱に代替された。）

又②昭和六年（1931）一月には殉難者十一名の慰霊碑をこの地に建立し干拓の礎石となりし御霊の安らかならんことを祈念したのである。③昭和十年（1935）には八沢浦干拓成功記念碑を磯上公園に建立し工事内容や翁の業績等を碑に刻んだのである。④更に磯上公園の旧事務所跡地に山田神社が造営された。昭和十五年（1940）皇紀二千六百年の時宣を得て、耕作農民が七千円宛の浄財を出し合つて、昭和十六年（1941）四月二十二日に式典を挙行したのである。祭神は農業の神とされている豊受大神を祀り翁の徳を後世に伝える意味と八沢浦干拓地内の平穏無事を祈願して山田神社としたのである。以降氏子たちにより毎年三月二十三日に祭典を挙行している。（当時の立派な拝殿は昭和三十八年（1963）不慮の災にあい焼失したが土地改良事務所の横に再建された）



昭和16年造営山田神社

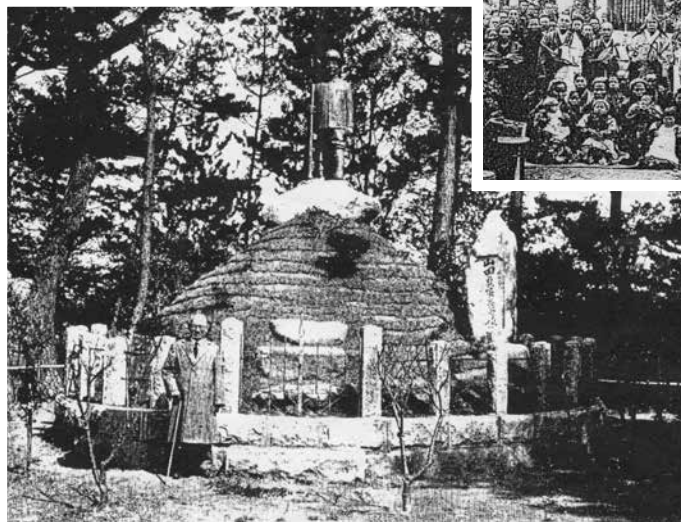


昭和10年干拓竣工記念碑



再建された山田神社

慰霊碑除幕式慰霊祭記念



山田翁寿像

八沢浦開墾事務所跡昭和3年7月建設高さ6尺5寸台座8尺題字農林大臣山本悌二郎

こうした顕彰がなされて来たことは地主対小作という厳しい関係の中にも苦難を共にしてきた生活や翁の熱意と人柄が耕作住民の心に灯を与えて来た結果でありましょう。

翁が三十八才で手掛けたこの干拓事業も六十六才の昭和九年（1934）には完工の運びとなった。

この間養老の大巻から福島八沢浦の干拓地までの往復は数限りなく繰り返されたのである。当時としては大垣から東海道線で東京に出て一泊して常磐線にて福島県の鹿島へ向かったのである。東京での宿は殆ど決まっただけで同じ養老の根古地出身者の経営する三崎町の三崎館であり「山貞さんのお泊り」と親しく利用されたとのことである。

翁自身もこの苦闘の二十七年間に及ぶ大事業中に犠牲となった農民の墓、排水機製作に骨身を削った出崎父子の墓の建立など犠牲・功労者の供養も大切にされてきたのである。

昭和九年（1934）には宮内庁より秋の観菊会に招待され新宿御苑での会で天皇・皇后両陛下よりその功績に対する篤いお言葉を受け翁は感激されたのである。

5. 薩摩義士の顕彰活動

- ① 薩摩義士顕彰会組織づくり
- ② 顕彰活動の一環としての薩摩義士顕彰会会報の発行
- ③ 薩摩工事役館遺蹟 平田靱負翁終焉地碑建立
- ④ 宝曆治水薩摩義士事蹟概要刊行
- ⑤ 平靱負翁銅像（修徳館内）建碑
- ⑥ 学校家庭課外読本薩摩義士編集刊行
- ⑦ 薩摩義士の事蹟を国定教科書に採録の請願
- ⑧ 薩摩義士義士堂の建設
- ⑨ 昭和十六年五月二十三日名古屋中央放送局より放送「薩摩義士と治水事業に就て」の全文



薩摩義士顕彰会発行繪はがきの千本松



薩摩義士顕彰会主催追弔祭典



薩摩工事役館遺蹟平田靱負終焉之地記念碑地鎮祭式場

① 薩摩義士顕彰会組織づくり 大正十四年（1925）十一月二十九日大垣共立銀行楼にて発会

薩摩義士の事蹟を天下に宣伝し、義士の神魂を現代に注入する目的の下に現会長の主唱で朝野名士の賛同を得て、薩摩義士顕彰会を組織し、総裁に公爵島津忠承公を推戴し左記の役員を置き、次記の規約に基き事務を執行する。

顧問 岐阜県知事 戸田銳之助、矢橋亮吉、金森吉次郎、西田喜兵衛、曾根太三郎

（大垣市赤松）

（大垣市代議士）

（三重県桑名）

会長 山田貞策 副会長 中島豊之助、水谷栄太郎 主事 大西吉雄

（淡谷代議士）

会則

一、本会は薩摩義士顕彰会と称し事務所を岐阜県養老郡池辺村大字大牧 修徳館内に設置

二、本会は宝暦年間木曾川筋治水工事に殉じたる忠烈無比なる薩摩義士の事蹟を広く世に紹介し、併て精神作興に資する所あらんと欲す

三、本会は如上の目的を達成せんが為に左の事業を遂行するものとす

事業部 義士役館趾に平田鞆負翁終焉の地に記念碑、並に養老公園附近に記念館を設置

出版部 義士の事蹟を国定教科書に採録せらるゝ様当局に建言し、併せて貴衆両院へ建議する。並びに調査及各種の出版を企画すること

顯彰活動の一環としての薩摩義士顕彰会会報の発刊

薩摩義士顯彰會報

發刊の辞

會長 山田貞策

ひはあるべき筈である、然るに當時の機師が之に一つも興へなかつたといふことは是れ果して何に原因

當時その顛末を公表する
 といふことが、幕府の嫌疑
 に觸れる爲めに、故さらに
 社會の時代思想が然らしめ
 するであらうか。

秘密に付せられたものか。
 兎も角も斯くも壯烈なる事
 が地下に葬り去られて、
 たものとも思はれる。
 當時の思想は偏に尙武に
 傾き、養生の質生活に關す

歩しも世に出でなかつたといふは、實に遺憾の極である。文士墨客の興味を惹かぬものである。

之を歴史上に考察しても
徳川時代に於ける最も偉大

有名なる日本外史に、唯だ王侯將相若しくは武士階級

それにも拘らず彼の同情は斐然として之に傾き、文も事蹟は一言半句も傳へて

凡て従来の歴史を見たと
往々に戦争の事蹟とのみ論

にまで上げやなのである。
大に傳へて、當時の經濟狀
況とが産業事情とかは殆ん

十五年二月一日薩摩

發行所東立

[illegible]

松賀雄木名るけ於に原松本千

に増々、大なり小なり、人に増されて居る。」
又由井正雪や大鹽平八郎如く徳川幕府に對し反叛した人々の事蹟に王にても人々たへながら、詳しく此に列へられて居る。
獨り薩摩義士の此事蹟が決して例になつたと云へない。

維新時代に於ては武士さへも民の價を知ることも、疑ふところのあるが戰場に於て命を捨つる武士の名譽とした所であらう。其武士が眞の兩方を差越して、卑屈視せられたる土木

事の爲めに一命を捨つるといふ如きは實に怨怒の極

義士顕彰会々報第

受けたものでは必ずしも理想する
ば、田舎者がたゞ思ひ得
るものではない。然し、
今時代は特殊にして、戦
争も平時と相違し、戦
つた上になつた、戦死した武士道
も、さう云ふ産業主義式で
なほ、さう云ふ産業主義式で
ない。武士道といふ産業主義
の方面でなくとも、ある
主義を貫つても、産

するもの、一種の部下を訓練
する、見る、一種の職を
及んで正當な責任及び部下
の後に追いつき又役務執行
下の困難とを謝する其心
情の温且、の古來たる其
人を見れば、戦歴上二十五年に若
き男が四十代半の老翁に對
して熱い行方無き道を、七
十八時分速に實地を安全

に及ぶ、軍隊を預け、兵隊

吾等若輩は義士と云ふのみ義士の權とて嘆ずべきで
大正時代の吾等は南洋義士
の如く産業上の義士たるべき
と其義士の組織となすべ
しは吾等が既に組織せ
るを以て直に聯合會
となすの所以である。

然りと雖も不可成なる
事にして西歐文明の如
く地味穀物と餘餘すに百
七十年來義士の權に於
けるも一義士より而て後
之を知る者鮮し南洋義士
會の起る所以は底思想
變化して其に覺ふ所而
して應之を金貨する者發
し而るを吾等する者發に
少ならずと云ふは先覺報

社會福利提升

山崎 八左衛門

古古人曰、勇略の下に綱寧ヲ
執シテ余命ヲ寶フ事能ハズに於
テ之ヲ以テ實績ナキ事能ハズ
として松本守衛守家年に木曾
川改修工程の大業を爲しし
中、東京市平田町に令
て役職を爲し、幕府監視

が顯ひ

本會は來る五月廿一日職員
先生命及の命を期し更に
於て完全な實績を爲す事
士事業を圖し、なにと思
て、まゝ其事業に上關す

も事柄はどんな小さいこと
でも、六十七の東京市平田町
第三六十四番町新町

一 号 (海津市高須宝曆治
士顕彰会支部編集発行)

報々會彰顯義士摩

水史跡保存会々々長中西清
大西 吉雄

薩摩義士顕彰会々報

大正十五年二月一日薩摩義士顕彰会々報第一号（海津市高須宝曆治水史跡保存会々長中西達治氏所蔵）
発行所東京市外池袋三六七薩摩義士顕彰会支部編集発行人 大西 吉雄

会長 山田貞策発刊の辞

如何なる故であつたか、宝暦治水工事に於ける薩摩義士の事蹟が二百年間埋没せられて、世に之を知るもの極めて稀であつた。当時其の顛末を公表するというのが、幕府の嫌忌に触れる為に、故さらに秘密に伏せられたものか。兎も角も斯く壮烈な事蹟が地下に葬り去られて、少しも世に出なかつたというは、実に遺憾の極みである。單に幕府の嫌忌に触れるという点から言えば、元禄年間の赤穂義士の快挙と雖も、之亦国法を犯して居るのであるから、公然之を賞揚すべからざる性質のものである。それにも拘らず世の同情は斐然として之に傾き、文士墨客は争うて之を伝え、変名を用いて鎌倉時代の事の如く装い、之を劇の舞台にまで上ぼせたのである。薩摩義士の事蹟の如きも当時真に血あり涙あるの文士があつたならば、変名を用いてなりとも、密に其の事蹟を伝えたものが、一人位はあるべき筈である。然るに当然の操觚者が之に一顧をも与えなかつたということは是れ果して何に原因するものであるうか。惟うに這は一面、封建社会の時代思想が然らしめるものとも思われる。当時の思想は偏に尚武に傾き、蒼生の実生活に關する産業上の施設などは、世の文士墨客の興味を惹かなかつたのである。是を歴史上に考察しても徳川時代に於ける最も偉大なる史家頼山陽の如きも、有名なる日本外史に、唯だ王候將相若しくは武士階級の殺伐なる闘争のみを描写して、人民の生産上に関する事蹟は、一言半句も伝えて居ないのである。凡そ従来の歴史を見ると徒らに戦争の事蹟をのみ誇大に伝えて当時の経済状態とか産業事蹟とかは殆ど黙殺されて居るのである。而してまた民間に行はれたる稗史小説を見ても、或は戦争に悲壯の最後を遂げたとか、主君の敵や、親の仇を討ったとか、悲哀なる情死を遂

げたとか、そういう種類の人々の事蹟は其善惡に拘らず、大なり小なり膾炙されて居る。又由井正雪や大塩平八郎の如き徳川幕府に対し反抗した人々の事蹟に至りても、曲筆されながらも、詳しく後世に伝えられている。

独り薩摩義士の此事蹟が煙滅して伝らなかつたと云うことは、單に幕府の圧迫に因るのみならず當時の士君子と自稱したるブルジョア階級や、文士墨客の有識階級やが、偏狭なる武士道を鼓吹して人類の生命に最も重大なる關係を有する産業そのものを蔑視した時代思想、その時代思想が産業上の土木工事を輕視し、従つて其の見栄えのせぬ事に尽したる、實に最も損な役廻りに立つたる幾百人義士を等閑視したものと判断することもできる。

封建時代に於いては武士たるものは米の価を知ることさえも恥じたるものであるが、戦場に於て命を捨つるは、武士の名誉としたところである。其武士が腰の両刀を差揃きて、卑賤視されたる土木工事の為に一命を捨つと云うが如きは實に悲慘の極である。平田鞆負氏以下幾百の義士が当時この大任を引受けたその心事を追想すれば、暗涙潜々たるを禁じ得ないのである。

今や時代は転廻した、戦争よりも平和が貴ばれる様になった。殺伐なる武士道よりも寧ろ産業道を重んぜねばならぬ様になったのだ。即ち武立国より産業立国の方が、重要となりつつある。主君の仇を討つよりも、産業上の施設に献身した方がどれだけ人生に有意義であるかも知れぬ。

吾等は赤穂義士のみ義士の標本として謳歌すべきではない。大正時代の吾等は薩摩義士の如き産業上の献身者をこそ其の義士の模範となすべきである。

是れ吾等が茲に顕彰会を組織して之を江湖に紹介せんと欲する所以である。

③

薩摩工事役館遺址 平田靱負翁終焉地碑 昭和三年（1928）建設



薩摩工事役館遺址平田靱負
終焉之地記念碑表

裏面碑文

題額 公爵 島津忠重
題字 元師 東郷平八郎

宝暦四年薩摩藩老臣平田靱負翁奉藩命來治

水也以鬼頭兵内宅充役館薰工翌年功成為

經費逾額引責自刃焉有志者憂事蹟歸泯滅

募資于江湖建石誌之云

（多くの）

昭和三年五月二十五日 建設

建碑會長 前岐阜県知事 鈴木信太郎

同委員長 前岐阜県書記官 平田貫一

薩摩義士顕彰會長 岐阜県 山田貞策

題額 公爵 島津忠重
寶暦四年薩摩藩老臣平田靱負翁奉藩命來治
水也以鬼頭兵内宅充役館薰工翌年功成為
經費逾額引責自刃焉有志者憂事蹟歸泯滅
募資于江湖建石誌之云
昭和三年五月二十五日建設
建碑會長 前岐阜県知事 鈴木信太郎
同委員長 前岐阜県書記官 平田貫一
薩摩義士顕彰會長 岐阜県 山田貞策

文部省登記部

薩摩工事役館遺址平田靱負
終焉之地記念碑裏

平田鞆負翁終焉地記念碑除幕式に於ける翁の式辞

今茲に薩摩工事役館遺蹟平田鞆負翁終焉地の記念碑工將に竣り、來賓各位の御臨場を辱うし、関係者一同相会し、除幕の式を挙行すると共に、聊か時^じ差^さ之典を具えて謹んで殉難八十五義士の靈を祭るは、本会の深く光栄とする所也なり。柳宝曆治水工事は其区域濃尾勢八郡百九十三カ村に亘り、宝曆四年二月起工し、翌年五月竣成に至る迄、月を閲すること十有四、費を糜^ひすること二百数十万両、三百諸侯の雄藩たりし薩藩の財源も之がために涸渴し尽くしたり。當時島津重年公の命を奉じて工事^{工事}兼督^{兼督}の任にあたりたる平田鞆負翁は苦心^{苦心}營々、漸く工事を完成す。

而して平田奉行は藩士を多く失い工費超過の責を負い宝曆五年五月二十五日此の地に於て從容として死に就きぬ。時に享年五十有二才遺骸は即夜京都伏見に輿送され二十七日大黒寺に葬らる。戒名を高元院殿節^{しん}了操大居士と云う。其事蹟は幕府に憚る所ありて久しく秘密に付せられしも、明治年代に至りて漸く世に顕揚せられ大正五年十二月二十八日天恩枯骨に及び畏くも平田鞆負正輔に従五位を贈られ、今や兒童走卒も薩摩義士の名を知るに至れり。不肖等亦感ずる所あり。事蹟の^{みんづ}低減^{低減}を憂兼ねて翁の精忠を表彰せんが為め資を全国同志者に募り、碑を大牧村役館の遺跡に建つ。顧^{おも}うに諸士逝いて星霜^{しんそう}一百七十五年濃尾勢八郡数百町村の土地は年々豊穰百万の生靈鼓腹して其生業を樂めり。感荷^{かんか}何ぞ堪えん。不肖等今日其の報恩の百分の一を表するを得たるは洵に本懐とする所なり。嗚呼世に悲壯泣くべきあらば、誰か先づ諸士の義烈を仰がざらん。自矜せるもの五十人、病没せるもの三十五人。嗚呼薩摩義士の名は千載朽ちざるべし。諸士の英靈庶幾くば享けよ。聊か蕪辞を述べて式辞とす。

昭和三年五月六日 薩摩義士顕彰会会長 山田貞策

(文中片仮名は平仮名に、漢字旧字体は新字体に直す)

④ 宝暦治水薩摩義士事蹟概要 昭和七年（1932）一月十五日発行



宝暦治水薩摩義士事蹟概要

ふとした縁から、宝暦治水史蹟保存会会長中西達治氏（海津市高須町）の知遇を得て念願の「宝暦治水薩摩義士事蹟概要」を京都の書林から求めることができた。翁の義士顕彰に寄せる篤き思いが全頁に溢れて居り一途に精魂せめて奔走された姿が想起され只々感謝するばかりである。それにしても翁の文字力、文章力、古文書の読解力……いっどこで身につけられたのであろうか？

今日薄れ忘れ去らんとする義士達の偉業をこと細かく書き留められたことに感謝するものである。ここでは翁の心情を最も寵められている緒言と碑建立時の式辞を戴くことに留める。

緒言

「（海邊）岐月南浪不驚」と歌はれたる山水明媚の「百二都城」を打立ちて「正是蜻蛉州尽頭」なる薩州から長亭短亭幾百里の道程を濃尾平野に繰込みたる藩士数百人、家来下人を合算すれば約一千人、総奉行平田鞆負が美濃国大牧の本小屋に着したのは宝暦四年閏二月九日の事であつた。当時未曾有の難工事を薩藩に命じた徳川幕府は、之を以て一大雄藩の勢力を殺がんと政策に出たのである。藩主島津重年公は隠忍自重、涙を含んで幕命を奉じ、工事の一切の^{（取捨監督）}薫督を家老平田鞆負に任じたのである。鞆負は一死以て事に殉ずるの覚悟を定め此の難局に当たつた。工事は実に至難であつた。宝暦四年二月二十二日工を起し、千辛万苦を嘗めて、翌五年三月二十八日漸く竣工を見た。最初参拾万兩の工費予算で着手したが、経費意外に超過して、無慮貳百余万兩の巨額に上つた。其間各自其の責に任じて自刃したる者は、前後五十六名、病に斃死たるもの二十九名、実に多大の犠牲を拂つたのである。総奉行平田鞆負は五月二十二日幕府派遣吏の検査を受け、「お手伝普請結構に出来致して御座る」との賛辞を博し、而して後自ら一切の責任を負い、五月二十五日大牧の役館に於て従容として自刃した。享年五十有二才。遺骸は即夜伏見の大黒寺に興送され其処に葬られた。大正五年十二月天恩枯骨に及び従五位を贈られた。余は其の事蹟を普く世上に紹介せんと欲し、薩摩義士顕彰会を組織し平田翁終焉の地たる岐阜県養老郡池辺村大字大巻の役館遺趾に石碑を建て永遠に之を記念する事にした。今亦其の事蹟を刊行し、之を江湖に頒ち以て国家風教を振肅するの一端と為さんと欲する次第である。

昭和六年八月一日 薩摩義士顕彰会会長 山田貞策 識

⑤

平田靱負翁銅像建碑

昭和九年

(1934) 修徳館内

裏面碑文



平田靱負翁銅像建碑



平田靱負翁銅像

文碑像銅翁田平下関事知

南濃之野地勢卑湿有木曾長良揖斐三大川並馳
入勢海每霖雨衆流相侵凌輒致漲溢潰田畝漂蘆
舍民不聊生寶曆年中徳川幕府命薩摩藩修治之
藩侯島津重年遣其家老平田靱負等赴役以寶曆
四年二月起工修堤浚河苦心慘澹翌年五月畢功
藩士從事者凡千餘人費藩帑三十萬兩役已竣總
奉行平田靱負俄自刃而斃蓋謝專斷增費之罪者
實可謂殺身成仁者也
昭和九年九月十日
題字 岐阜県知事 宮脇梅吉
撰文 伊藤 信
建設者 顕彰會長 山田貞策

平田靱負翁銅像碑文

南濃之野地勢卑湿有木曾長良揖斐三大川並馳
入勢海每霖雨衆流相侵凌輒致漲溢潰田畝漂蘆
舍民不聊生寶曆年中徳川幕府命薩摩藩修治之
藩侯島津重年遣其家老平田靱負等赴役以寶曆
四年二月起工修堤浚河苦心慘澹翌年五月畢功
藩士從事者凡千餘人費藩帑三十萬兩役已竣總
奉行平田靱負俄自刃而斃蓋謝專斷增費之罪者
實可謂殺身成仁者也

昭和九年九月十日

題字 岐阜県知事 宮脇梅吉
撰文 伊藤 信
建設者 顕彰會會長 山田貞策

⑥ 学校家庭 薩摩義士
課外読本 校閲 大久保利武
著者 大西春翠

大正十五年（1926）二月一日 公民教育の一端に資する為編集
皇族殿下の台覧を得、内閣総理大臣若槻礼次郎氏より「義氣垂千古」
前文部大臣岡田良平氏より「鬼神泣壯烈」の題字を戴く

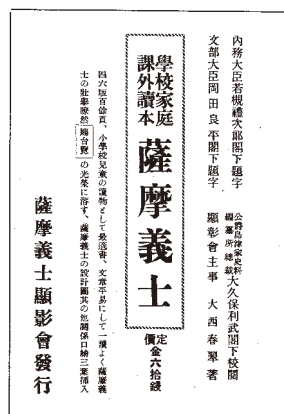
⑦ 薩摩義士の事蹟を国定教科書に採録の請願

大正十五年（1926）三月四日会長外四十一名は代議士奥村千蔵氏の紹介で薩摩義士の事蹟を国定教科書に採録
の件につき請願書を粕谷衆議院議長に提出した。

請願書

古人曰ふ「志士仁人は身を殺して仁をなす」と。宝暦年間、木曾・長良・揖斐三大川改修工事の犠牲となりた
る薩摩義士の如きは、善く其生を捨て其仁を成せるものと謂うべし。

惟ふに宝暦治水の工事は岐阜三重愛知の三県下に亘り延長実に十里を超へ生民百万の休戚（あやうせき）に関する偉業なり
き。当時徳川幕府の命を受けたる薩摩藩士は、慨然主命と体して任に赴き、総奉行平田正輔以下諸員、協心戮力（きやくしんりくりき）
寢食を忘れ、万難を排して工を督す。工費実に貳百万両（今日の米価に換算せば一億二千有余万円に該る）（あた）を超



学校家庭課外読本薩摩義士

へ、工を完せんか、予算の超過を免れず、之を止めんか藩公の面目と民の辛苦を奈何せん。遂に一生以て臣節を尽さんと決心し、工に従ひ責を負ふて自刃するもの前後五十有余名、任地に於て病に斃るゝもの三十有余名に上り、無事帰国したるは甚だ少数なりと云う。義士哀情の悲慘行動の壮絶、何を以てか之に譬へん。而も幕府に対する關係上義士の偉蹟は秘密の裡に葬られ、大業永へに生き生民感孚すと雖も、義士空しく瞑して大義顕れず痛恨何ぞ堪えん。然るに明治の聖代に臻り義士の事蹟暫く顕れ、大正十五年十二月にはその忠節天聴に達し、平田鞆負奉行に贈ふに贈從五位の恩命を以てせらる。爾来漸く世人の瞻仰する所なりしとは言へ、彼の赤穂義士の事蹟が兒童走卒の間にまで普及せるに對し、此の薩摩義士の事蹟が未だ以て全国民の耳目に觸るゝに至らざるは洵に千秋の恨事たらずんばあらず。乃ち意ふに此の際宝曆治水義士の真相を国定教科書に採用せられ、先人の道徳を領すると共に、第二の国民をして犠牲献身、忠勇義烈の大義を訓ふるの資ともなり、日々に萎微沈衰せんとする国民精神の作興に寄与するところ、亦大なるものあるべきと信ず。希くば下名等の微哀を諒せられ、願意御採択被成下度。

右請願仕候也

大正十五年十二月

岐阜県養老郡池辺村大字大巻五千三百五十九番地

農業 族籍平民 山田 貞策

慶応三年二月七日生

外五十余名

⑧ 薩摩義士義士堂建設案

薩摩義士の忠魂を慰する堂宇^{どうう}を建設し、以て益々^{ますます}犠牲^{ぎせい}献身^{けんしん}の精神を奮起するため義士堂を建設する。堂内には一尺八寸の平田翁の木像を安置し、八十四義士の霊を合祀す。但し、趣意を配布し篤志を募集されたようだが義士堂の建設はされていない。木像も行方不明。誰も知らない。（平成二十四年秋）

⑨ 昭和十六年（1941）五月二十三日

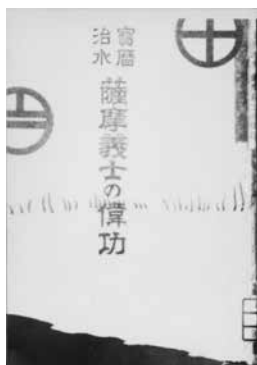
名古屋中央放送局より放送

薩摩義士顕彰会会長山田貞策の

「薩摩義士と治水事業に就いて」の全文

冊子

宝暦 治水 薩摩義士の偉功より集録



宝暦治水薩摩義士の偉功

私は只今より薩摩義士と治水工事に就ての事蹟を述べ其の美挙を顕彰いたしたいと思ひます。頃は今より百八十二年計り以前即ち、宝暦四年頃の事柄でありまして徳川九代將軍家重公の時代で薩摩では島津家二十四代重年公の世で公は時に年廿六才の年若き藩主でありました。諸御話しまする宝暦治水美談薩摩義士の事蹟は我美濃の国を中心といひまして、尾張伊勢の三ヶ国に亘り年々水害を蒙る木曾、長良、揖斐の三大川に跨る南北十数里、流域延長式拾有

余里に散在する沿岸百九十三カ村の人民数十万人の死活問題に係る農村救済の一大治水工事の事蹟であります。抑此地方は往古より洪水の害酷しき地方で、後奈良天皇の（人皇百五代）天文四年（1534）には（今より四百年以前に当ります）美濃の大洪水にて溺死せるもの二万余人と古き書物に記載せられ、其後天正四年（1576）より宝暦三年迄に（此の間百六十七年間に成ります）九十二回の大水害が繰返されましていつも一朝大雨があれば木曾川先づ増水して長良川に溢し又更に揖斐川の水を増し其結果は川沿の村々を浸し見渡す限り一面の泥海と化しまして、其の都度耕作物を荒し家屋や道路、橋梁を破壊するのは勿論人畜の被害もあつて住民塗炭の苦しみは一通りのものでなく毎年雨期には、枕を高くして安眠することが出来なかつたのであります。斯の如き水害が毎年繰返されておりましたから其の水害地に居住しておりました人民は年々幕府へ河川改修、堤防築造等の事を嘆願しました。中にも美濃多芸郡下笠村の七里孫衛門と云う人は享保、元文の頃低地百カ村の村民を遊説して大樽川築切の嘆願書を認め身命を賭して自ら江戸表に上り幕府へ強願せし為め獄屋に囚われの身となりました。又宝暦三年には伊勢油島の百姓伝蔵と云う人が桑名藩主が大垣藩主戸田候へ水害救済の件を打合せの為め舟で揖斐川を上らるゝ時、松平候へ百姓救済の嘆願を直訴したる廉で打首になつた事がありました。其の他各村の庄屋名主等よりも毎年幕府へ徹底的治水工事を施されたき旨を嘆願に及んで来ましたが、遂に機が熟して幕府も捨て置き難く治水工事を行う事になつたのであります。然るに斯の如き大工事は巨額の資金を要しますから幕府自ら着手することも出来ず、又附近の關係諸大名へ命令するにしても到底容易に応諾せしむる事が困難でありますから是を富裕の聞えある西国の大々名薩摩の島津家に命じたのであります。（此の島津家に命令する様になつた事について一言申添えておきたいことは）薩藩は従来西国一の大々名に

して彼の一世の豪傑太閤秀吉ですら九州征伐の節之を征服することが出来ず、遂に双方和睦して引揚げたと云う程の強藩にして又天下分け目の関ヶ原戦役の際も西軍に属する島津義久が敗北して本国薩摩へ歸る時も僅かの手兵を以て故意に徳川家康の本陣を突撃して養老山脈の西の間道より引き揚げたと云う様な強い藩でありますから幕府はいつかはこの富強なる島津家に莫大な金を使わせ将来徳川家に反抗出来ざる程の貧弱な藩にしたいと始終時機を考えて居りし際でありますから好機逸すべからずとなし遂に御手伝普請の美名の下に宝暦三年（1753）十二月二十五日突然縁もゆかりもなき江戸の薩摩藩の留守邸へ強いて治水大工事引受の嚴命を下したのであります。薩邸に於ては直に急便を薩摩の本邸に遣し報告しました。

本邸では翌宝暦四年正月三日右の報告を受け寝耳に水の大騒ぎにて、直に重年公の面前にて重臣會議を開き種々評議を凝しました。而して此の命令を拒めば幕府に反抗するとの口実を以て幕府は直に天下の兵を差向け討伐の挙に出ずる事は明白にして又進んで御受けすれば莫大の工費を負担せねばならず殆ど進退兩難の窮地に陥りましたが時の家老の筆頭平田鞆負は一同を顧み普天の下卒土の浜皆陛下の国土臣民にあらざるはなし故に此の地方の百万住民を救うは取りも直さず皇室に忠勤をぬきんずる所以にして我が薩摩藩は祖先以来勤王の聞えある家柄なれば進んでその工事を御請けするこそ当然であるとの進言に衆皆賛成の意を表し、直に木曾川流域の治水工事を引受る事に決まして家老平田鞆負正輔自ら総奉行となり伊集院十蔵久東を副となし其他部下九百有余名の大衆を率いて正月九日鹿児島を発し海路舟にて大阪に出て二月三日遙々三百里を距つるいまだ見も聞きもせざる地理不案内の美濃大牧（現今岐阜県養老郡池辺村大字大巻の記念碑及び銅像の建設してある土地）の豪農鬼頭兵内方へ到着しこの所に工事監督総本部

即ち本小屋を置き更に各工事場を四区に分ち出張り小屋を設け、一の手は美濃桑原輪中より下流尾張神明津輪中に至る間、二の手は尾張梶島村より下流伊勢田代輪中に至る間、三の手は美濃墨俣輪中より下流高須輪中に至る間、四の手は伊勢全廻り輪中より下流浜の地蔵に至る間として各々受持主幹を定め二月二十七日を以て各区一斉に工事を始めました。此の工事区域は美濃六郡百四十一カ村、伊勢一郡三十五カ村、尾張一郡十七カ村計百九十三カ村に跨り延長六万三千六百一十一間（約二十八里）に及んでいました。然るに元來薩摩藩には大なる河川のなき所故、治水事業に経験のある人もなく殊に地理不案内の為毎年春季雪解の為め各河川の洪水のある事を知らず為めに三月に至り俄かに各河川の雪解の大出水に出会い已に施せし工事は勿論、折角収集せる材料等も大半一夜にして水に流され破壊せられたるを以て五月二十二日、一時工事を中止するの已むなきに至りました。其の為に大阪表にて用達し来りたる三十一万両の金子は残り少なくなりました。（一寸此の所にて薩摩藩の財政の内容を御話しますが）幕府の見込んだ薩摩藩は思つたより財政不如意にて已に其の時には大阪方面の用達に巨万の藩債があり要路の有志は大に整理に頭を悩まし居りし時代でありましたから三十万両を大阪に借入て来たのであります。この財政の窮乏の時に縁もゆかりもなき美濃・尾張・伊勢の人々の為の莫大の金子を使うのは実に容易ならざること、我々水害地に居住して居る者は大に薩摩藩に感謝せざるを得ぬ次第であります。故に更に貳拾万両の追加借入を大阪の薩摩御用達に申込み、九月二十二日出水期を脱せし秋の彼岸より再び第二次の工事に着手したのであります。尤も此の当時の五十万両は中々の大金にて、其の当時の米価に引当て之を今日の通貨に換算いたしますと実に四千五百万円以上の巨額に達するのであります。斯く莫大の金子を消費し幾多の犠牲を払いまして漸く翌年即ち宝暦五年五月迄に各工区の工事も全部終了いたしました、同

五月二十二日幕府係り員の検分を受け、さしも至難の大工事も薩摩藩士の粉骨碎身の努力の甲斐あつて無事に落成引渡しを済したのであります。此の工事中最も困難を極めた至難の工事は治水神社鎮座の高須輪中の油島千本松の木曾川、揖斐川の分流背割堤の工事及美濃福束輪中大藪にある長良川の分流、大樽川洗堰工事並に美濃桑原輪中にある逆川逆水止め工事でありまして加うるに工事中種々障害困厄に遭遇し、太刀を取つては百万の大敵もおそれない薩摩隼人も鋤鋤取つて慣れぬ土工となつて苦心慘澹骨と肉とを以て努力も水泡に期し諸事意の如くならざる為切齒憤慨責を負つて藩士中永吉惣兵衛首方貞淵・江夏次左衛門・永田休左衛門・永山市左衛門・野田喜八・平山牧右衛門・犬山市兵衛氏等を始め八十有余名の割腹自刃又は病死等の悲惨なる出来事が続きました。現に桑名の海蔵寺には十五名、安八郡藪町江翁寺に六名、羽島郡江古良村清江寺に三名、養老郡池辺村天照寺に廿七名、海津郡石津村円城寺に十三名の墳墓がありまして、去る大正十四年（1925）十二月二十五日養老郡大牧にて平田鞆負翁の追弔令を執行せし節、偶然にも私共が海津郡今尾町常栄寺に於て薩摩藩士黒田氏外一名の墳墓を新に発見したのであります。尚此の外にも薩摩義士の墳墓が発見されず、空しく地中に埋つて居ると思いますから各工事場附近の寺院の墓地を調査する考えであります。右の次第で総奉行平田鞆負正輔は一切の關係書類を整理し、江戸表の藩主重年公及び幕府へ報告の為本小屋美濃大牧村鬼頭宅を出発せんとするの際、総奉行平田鞆負正輔は藩主に対し予算超過の責任感又部下八十有余名の犠牲者に対する同情等全部の責任を負い宝暦五年五月二十五日早朝美濃大牧本小屋に於て東に向かい合掌礼拝の後潔く自刃して悲惨なる最期を遂げました。屍は籠に乗せて即夜中仙道大垣より京都伏見にある薩摩藩の菩提寺の大黒寺に（是は明治維新の際伏見吉田事件の烈士の墓のある寺です）厚く葬りました。今現に立派なる墓碑が建つて居ります。

其の為副奉行伊集院十蔵久東は翌五月二十六日美濃大牧の本小屋を出発し江戸へ上り六月廿六日を以て江戸の藩邸へ到着して夫々工事落成及総奉行平田鞆負自刃の顛末を報告致しました。之れより先已に病床の人となり居られた薩摩の守重年公は右治水工事のため心労の結果翌年他界の人となられまして誠に悲慘の事でありました。右の事情でありますから先年桑名海蔵寺には義士の忠魂堂、岐阜県海津郡油島千本松原には治水神社、同安八郡大藪町には洗堰記念碑、養老郡池辺村大牧の本小屋即ち総奉行平田翁の終焉地には記念碑及銅像が建設されまして大巻にては毎年五月二十五日の命日には平田翁はじめ義歿者の追弔令が行われます。

以上の事蹟は彼の有名な元禄赤穂義士の快挙にも劣らざる事蹟でありまして、我が神州の精華を遺憾なく發揮せしめたる義挙であります。古人の言に慷慨義に赴くは易く従容死に就くは難しと云う語がありますが、総奉行平田翁の此の挙は最初より生を捨て義を執る決心を以て郷里鹿兒島を出発し、成功の後は屠腹自決以て謝すべきのみと覚悟して工事に着工せられたるは誠に悲壯なる事蹟でありまして、爾来木曾川・長良川・揖斐川の三大川の分流工事の成功も此の工事が基礎となったのであります。只今にては天下有数の肥沃なる土地となり沿岸百万の住民の恩恵を受くること多大であります。

此の壮烈なる事蹟を顕彰追慕することは時將に時局緊迫の際国民に犠牲献身の思想練磨の一助ともなり、又大東亜建設の企図、臣道実践に裨益すること甚大なることを信じまして誠に浅薄をも顧みず貴重なるお時間をお借り致しましてご清聴を煩しましたことを感謝いたします。

6. 山田家墓塋（個人墓地）

山田正悦 円寂慧光院正悦法師

山田家の元祖にして尾張国海東郡花常村高田正覚寺住職たりしが寛文十年（1670）美濃国石津郡に移住し高柳新田を開墾したる人也

元禄十五年（1702）五月二十七日寂 六十五才

「昭和九年七月二十日 貞策建立」の墓碑より

一世 正覚院釈智曉西安法子

寛政二年（1790）七月二十七日没

二世 深信院釈観月久西居士

文化五年（1808）十一月二十五日没

三世 開善院釈観月蓮乘居士

文化二年（1805）四月四日没

四世 清涼院心月西休居士

嘉永五年（1852）二月朔没



正悦之墓

五世

清悟院釈円月喜西居士

明治二十一年（1888）九月十八日没

七十八才 孫左衛門

六世

慈光院釈栄教盛西居士

明治三十七年（1904）九月七日没

六十九才 運四郎

七世

実相院釈帰入宝城居士

昭和十九年（1944）七月九日没

七十八才 貞策

無碍院釈麗光妙恵大姉

昭和十五年（1940）二月十四日没

六十七才 登美恵

清月院釈慈光貞照居士

昭和六十年（1985）一月一日没

九十才 利貞



貞策夫妻の墓



墓域全景

慈眼院釈千寿妙芳大姉

昭和五十八年（1983）五月二十七日没

八十才 千代

慈善院釈愛医衛徳居士

平成十八年（2006）七月八日没

七十八才 衛（まもる）

墓域下段

一、平田鞆負翁銅像台座（修徳館内に設置され像は役館跡に移される）

裏に為感恩報謝建立 昭和十四年九月 山田貞策

一、山田柳坡之碑 昭和十九年（1944）春建立

碑文

山田貞策氏高柳新田開発者山田正悦十世の孫なり柳坡と号す慶応三年二月七日高柳に生る夙に志を殖産事業に傾け明治二十七年排水機を自村に設置す是れ全国排水の嚆矢なり岐阜県会議員当選二



墓域下段全景

回其の他県農會議員郡農会長郡會議員池辺村長村農会長多芸輪中堤防委員所得税調査委員戦時特別調停委員等の公職を歴任す明治三十九年福島県八沢浦干拓事業に着手し経営三十年良田三百町歩を開墾す功を以て昭和九年新宿御苑に於て観菊御宴に陪するの榮を得たり旅行を好み足跡遠く支那滿州蒙古に及ぶ又朝鮮に農場を経営す大正十四年薩摩義士顕彰会長となり宝暦治水の遺徳を全国に宣伝す昭和四年福島県開墾地の有志者謀り其の銅像を建設す次て昭和十六年山田神社を創立す茲に其の事蹟を略叙し以て後昆^{こうこん}に伝ふ

裏面
(漢字 現代体に 片仮名―平仮名に変えて記す)

・国のためつくしてちらんやまさくら

島津公爵題額

七十八叟 柳坡



柳坡の碑表



平田勲負翁銅像台座

服部 斐川 撰文

河野 金泉 揮毫

昭和十九年春建立

薩摩義士報徳会

一、句 碑

すさび行く 思ひ出 栗の花 落る 光太郎（衛の俳号）

老いてなほ 子は母のもの 水中花 千代女（千代の俳号）

裏 面

高樹旭氏山田衛博士のお力添により十余年来の長きに亘る
病苦に打ち勝たれしを喜びのあまり博士の御両親との親睦句を
碑に贈りこれを永久に記念す

側 面

右 滝の辺の光りの幽く秋きつ、 旭子

左 昭和三十六年五月 養老句会建立



山田利貞と千代の句碑



柳坡の碑裏

7. 山田家の子孫の人々から

一、平成二十四年十二月十九日 山田邸訪問 午後二時～三時半

山田ムツ子（翁の孫 衛の妻） 裕（翁の曾孫 現山田医院院長）

山田昌子（翁の孫・昭和五年生まれ 翁を知る重要な人）

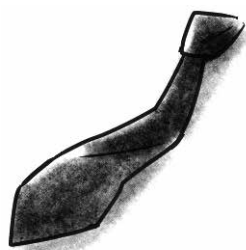
の三方より

翁はどうして豊富な知識・旺盛な行動力を身につけられたのだろうか？強く思う此の頃である。遺された書簡一片を拝してもその文字たるや力強く品格のある筆文字、楷書ばかりでなく行草体まで駆使し、語彙の豊富なこと漢字・熟語を多く知っておられること。今、辞典を開かねば解せないことばが多く使われているのに感服する次第。この力……いつ、どこで身につけられたものだろうか？常に関心するのであるが三方のお話を伺うと一層その人徳の篤きが痛感されるのである。

①翁は好奇心が強く時代の先端をゆく新しいものをすぐ身に取入れる、研究するといったタイプ。その上進取の気も強く大変おしゃれたったと

例えばネクタイ……明治初年洋服を着用していた人は養老でも何人居ただろうか。洋服にネクタイを着けて、ネクタイの結び方をよく知らないし、それを教えてくれる人も近くに居ない当時結んだものを求めて着用していたと。

ステッキ……立ち姿のどの写真にもステッキを必ず手にして居られる。私どもの子ど



ものころ昭和初年にはステッキを持つている人は偉い人と思ったものである。武士の太刀を、また当時のお巡りさんのサーベルにつながる思いがあったのだろうか。

眼鏡……事実視力が弱かったのかどうか判らないがずっと着用されていたらしい。これも明治初年には眼鏡を掛けている人は珍しいことだった。国民皆兵といって男子二十才に達すると徴兵検査を受けねばならなかったがその検査で眼が悪いから甲種でなくて乙種だったとか。翁にとって①眼鏡②ネクタイ③ステッキの三種がトレードマークだったのかも。

頭髮は薄い方だったが、床屋さんへはよく通われたと。毛が少なくてその上そんなに伸びていないことから床屋さんが困ったのではないかと思われるほどだったが近くの昌子さんの家へ行くときはきまつて床屋さんを経由してからだだったと。身だしなみには随分気を使って居られたのであろう。

②孫さん達をこよなく可愛がつて居られたと……オルガンを購入し専門の先生を頼んで練習させられたと。地方の小学校にオルガンが採用されたと同じ頃でしょうか。いづれにしても家庭教師を雇って音楽に親しませたことは普通の家庭で、いや感心の深い方でない限り考えられなかったことである。昌子さんはこの御蔭で今もクラシック音楽が好きで親しんでいると思いをめぐらされていた。

四才の孫さんが夭逝されたときがあったと、福島の翁のもとに実篤の急報が届きすぐ帰郷されたが間に合わず「遅かったか」と涙のうちに深く悼まれたと。斯様孫煩惱の翁であった。



また孫たちのおやつによくキャラメルを買ったと。キャラメルも当時としては一般的ではなかった。翁が観菊会に招待され記念に戴かれたお菓子落雁も分け与えられたと

③意外なことに翁は強剛な体と強い意志力の人で百才まではと周囲の人も思い、また本人もその気であつたらしいが七十八才で急逝してしまった。これが交通事故の後遺症が原因だったらしく、昭和十六年米・英・蘭と戦争状態に入ってから敵機の夜間空襲に供えて灯火管制令が敷かれ、電灯の明かりが屋外に洩れることを厳しく取り締まられたものである。六十ワットくらいの一個の裸電球にボール紙製の筒型の笠をかけ更に黒い布等を掛けて明かりが洩れない様に心掛けたものである。勿論点灯して夜間外出することも、禁ぜられたものである。そんな中で家近くの堤防上で暗闇から来る自転車に刎ねられ堤下に転落。腰骨を損傷されたのである。現在なら救急車、救急医療も受けられたでしょうが当時としては十分な治療手当もなかったでありましょうし、単に骨折だけに止まらず内蔵にも悪影響を及ぼしていたのではないのでしょうか。ともかく全く予想されなかった昭和十九年七月死逝されてしまったのである。今墓域に薩摩義士報恩会（鹿児島）による翁の記念碑が昭和十九年春に建立されているがその碑に“国のためつくしてちらんやまさくら”と詠まれた翁の句が刻まれている。

④株式投資といったことにも鋭敏な才を持って居られた様子。或る時の収益によつて、修徳館を一気に建立されたと（大正九年）又取り壊されることも一気だったと。修徳館を地元の人々は西洋館と呼んでいた。明治村が開設される時この館を移築話もあったが大正年中の建物だからとはずされたと。この修徳館で一時孫の衛さん夫妻による医院が開業されていた。地元の古老に山田医院でお世話になったと語る人もあり、衛博士に十年來の病苦を治療して

もらった御礼にと句碑を寄せている人もある。また館に地下室があったと。戦時中に強制的につくらされた防空壕であろうか。

(※現海津市平田町今尾三二二 長谷川千代子さん(大正二年四月二十日生九十九才)は尾張屋(菓子屋)の裏屋敷で診療所が開

業されていて私もお世話になったこともあったと平成二十三年三月十七日聞取)

⑤利貞氏(翁の長男)……今までの八沢浦干拓記の中に記されていないがやはり福島の方に住居され蔭の手助けをされたのでありましょう。経済学を専攻し銀行勤めもされたが早く退め翁の秘書役をつとめられた赴きである。

⑥昭和二十年八月十五日敗戦という憂き目の中に戦争終結をした日本。この日から天と地をひっくり返した様な大変革に迫られ、占領軍の配下に過すことになった。その一環としての農地解放令(昭和二十一年)よって今まで大地主だった山田家の農地も悉く小作人へ解放譲渡の羽目になってしまった。また新円切換令によって持高の制限も余儀なくされた。大きな変革に攻められ従前と全く異なった生活を強いられた方々が多く続出した一時代であった。山田家にもこの荒波は例外なく及んだ筈である。此の荒涼たる世を脱出する途を医業に求められたのであろう。衛氏は立派に医者として奥さんと共にここに開業されたのである。機をみて昭和三十九年に現在地に転ぜられ、昭和六十二年には確たる山田医院を建立され医療活動を広く家族ぐるみで展開されている。喜ばしい限りである。

平成二十四年十二月二十二日記





山田貞策翁銅像



山田利貞と千代



八沢浦の油絵



現在の山田医院



養老町から移転された灯籠
「昭和九年九月建立山田貞策」
の刻あり



山田神社由来記 (2001年8月21日撮影)



奉納 山田神社新築記念

祈武運長久

皇紀二千六百年十二月吉日

□ 婦人会一同

奉納額



犠牲者の墓と山田衛氏
(2001年8月21日撮影)

二、平成二十五年一月三十日（津島市又吉町二―二七 鷺野医院）（午後一時半―三時）

鷺野佳子氏（翁の孫・利貞の長女・大正十五年生）訪問

①山田家で伺った時と同様翁はともかく新しいものをすぐに取入れるといった時代の先端をいくタイプでラジオが出れば真先にラジオを購入するといった風で・・・

イ、洋服にネクタイは普段着姿で外出には山高帽・ステッキを手離さなかったと

ロ、利貞氏の内室は昵懇にしていた船附の谷金吾氏の娘さん（千代）婚姻の時、琴をよくされ持参されたが、これからは琴よりもオルガンだとオルガンを手習う様すめられたと

ハ、佳子さんら女学校時代にはオルガンよりもピアノだと与えられたと

②佳子さんの頭に強く残る翁の思い出は

水害から農を守ること（排水）

に懸命、夜を日について走り廻っていた姿だと

薩摩義士顕彰会

③干拓工事を翁と共に鋭意推進された茂治さん、援助された服部正夫さんらの後裔の方は津島近くに居住されている
由（服部さん 孫―津島で大鹿齒科、茂治さん 孫―津島で浄蓮寺）

④船附の庄屋谷金吾氏とは特に懇意にされていたなかで何事をするにも常に行動を共にして居られた。特に薩摩義士顕彰会には顕著だったと 前記のように長男利貞氏の室に谷金吾氏の娘さんを貰い入れたり、谷氏のつとめの安田銀行に利貞氏が勤めたり・・・。

⑤修徳館 赤い屋根の二階建てのモダンな洋館建 当時としては此の地方で目新しいたてものだった。村人には晴耕雨読堂と親しまれ、教養娯楽の場として利用され、時には結婚式場にも利用された。また戦後衛氏（利貞の長男、貞策の孫）夫妻による山田医院が開業されていた（今尾に分院）衛氏は始め翁の跡を継ぐべく東大農学部に進まれたが戦後の農地解放などの大変革と将来を見据え医学部へ再挑戦をされたと。昭和三十年代半ば堤防拡張工事の際、館も立除きを余儀なくされ取り壊される運命になったと。之を機に東京藤沢への転出をはかれたに至った由。

⑥前記の様に大巻を引揚げられるとき庭におかれていた石灯籠を鷺野氏へ、翁の胸像と小型の灯籠を山田家へ形見として移転された。

⑦八沢浦に建立された「山田家之塋」は八沢浦に永住のことも考慮され大巻から分骨建立された由。

⑧山田家の建物（修徳館）の一部が船頭平の閘門の操舵室に移転利用された時もあつたと（今の閘門は平成十三年に新しくされている）

⑨翁は子どもを教育するだけの資金が残れば充分と所有の全財産を農を守るため八沢浦干拓事業につき込まれた。亡くなられた時はさすがの大富豪だった山田家に残るものは少なかったと、農を愛する 水害から村を守るといふ思いは強く晩年骨折され歩行困難であつた時でさえ、台板に乗せてもらって田圃めぐりを果たされた、家族の方々にはそんなにしなくても思われたでしょうが翁の農への強い執念はどうしても斯様までにしなければ気が収まらなかったのでしょうか。

⑩翁の葬は土葬であったと 筆者も昭和四年に祖父を土葬にした記憶があり また昭和三十五年に土葬の式に会したことがある。一間四方に身の丈ほどの穴が掘られ覗き込んだことを覚えている。当時は今の様な寝棺ではなく座棺だった。埋葬した後地に石等を置いたものである。今山田家の塋域の一ヶ所に「南無阿弥陀仏」と刻された古びた石が置かれているが これが土葬された ところかもしれないと思われる(平成二十五年一月三十一日記)



移転された石灯籠

⑪大巻の山田家塋域は柵で囲まれ常時施錠されておりその鍵は今一番この地に近い鷺野氏は保管され 毎年の墓参は欠かさず参して居られる由 成程域の周囲の樹木の剪定もなされ いつも聖なる塋のたたずまいである。

⑫平成二十五年二月八日 再度鷺野氏訪問

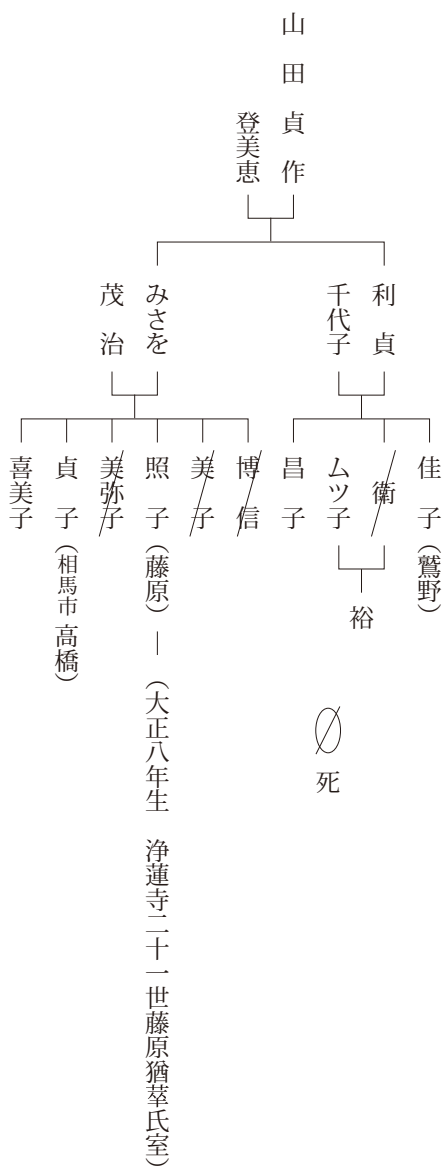
平成二十三年(震災前の発行)の鹿島の干拓歴史ガイド書を貰い受ける

⑬山田茂治さんの後裔のお家にも「八沢浦干拓物語」が保管されている由(二月二十日鷺野氏より電連)

⑭木曾川文庫に鷺野家より冊子薩摩義士の偉業、薩摩義士顕彰会設立当時の絵葉書四枚組が寄贈されている。

津島市浄蓮寺に藤原照子さん（翁の外孫）を訪ねる

死





茂治夫婦

照子さんは右系図の如く八沢浦干拓事業の後期難事業の推進役だった茂治さんの次女であり現在九十三才車椅子を利用されているが大牧の翁の元から大垣高等女学校に在籍されたこともあり余り多く語られなかったが記憶ははっきりしていて私共の質問には明確に教えて下さった。

この日照子さん現坊守の星子さん、同行案内して下さった佳子さん、その娘京子さんと四人翁と縁深い方々が揃って下さっておいで下さる八沢浦時代からの古いアルバムを提示して下さいそのアルバムをもとに懐かしい深い思い出に次々と花がさいていった。中には佳子さんの日本舞踊発表会（小学一年生頃か）の晴れ姿もあつてにぎやかな間に傍らで耳を欽ている私共も往時の光景を頭に描くことができた。

アルバムの中に今まで全く見ることの出来なかつた茂治さん夫妻。鹿島に建てられていた翁らの住家……など貴重なアルバム、写真等を快く借用することが出来て、心強い支援をいただいた今日の訪問であつた。



相馬市の住居

四、平成二十五年六月二十四日

福島県相馬市在住の高橋貞子さん（山田茂治さんの四女、八十九才）より

① 茂治さん 大正十二年（1923）九月一日の関東大震災の時丁度東京に出張していて罹災 暫く生死不明で

あつたが数日後ひよつこり帰宅された と 貞子さんは大正十二年九月十五日生、丁度その頃戻つ

て来られたのでしょうか。

② 紙芝居 「拓く心いつまでも八沢浦物語」 まち物語制作委員会

いくまざ鉄平より（三十一枚組）

以前発行の八沢浦物語の筋を踏んで現代化されわかりやすく作成されたもの。「再建された山田神社を心に「今度は私たちの手で美しい農地を再び拓いてみせます。」と結ばれているのに意を強くする。

③ 写 真 平成二十四年二月二十九日写

・熊本県人吉市の球磨工業高校生の手になる山田神社
・地震津波で倒れた碑を再建 山田貞策翁寿像



紙芝居はじまり



再建の山田神社の鳥居をみんなで立ちあげる

紙芝居終わり

8. 八澤浦物語



八沢浦物語

沖野岩三郎著 明治九年和歌山県生 明治学院神学部卒業 小説童話の創作及び日本古代史の研究

昭和十八年十月三十日 金の星社より発行

昭和五十年十二月一日 相馬通信社より復刻

著作者のことば

山田貞策さん、山田茂治さん、大橋健蔵さん（干拓会社事務）、若杉広吉さん（鹿島町中村屋に勤めた人・左納さんを八沢浦に案内した人）、杉山元治郎さん（親友）、佐納栄三郎さん（東京本所柳原六番地）、出崎猪之助さん（生前にサイホン式排水機について話をきく）の各氏に直接話を聞き書きまとめた事実物語である。

① 出崎栄太郎

安政六年（1859）大阪岸和田に生まれる 長じて大工の弟子だったが機械に関心大

明治五年（1872）堺にイギリス製の糸とり機（紡績機械）が輸入 二十一才の時大阪へ紡績機械を見学に行き七日間かけて機械の各部を写しとり、鍛冶屋の修行をした上で小型の糸とり機を製作する だが機械で取った糸は弱くて不評 破産に至る 止むなく櫛づくり魚釣り機など手掛けるがどれも販路が開けず大工に戻る

明治二十四年（1891）濃尾大地震 大工弟子と倒壊被害の大きかった大垣へ来て主に寺社の再建につとめる 翌年製糸工場経営者（本巣郡穂積村）井上源衛の依頼を受け製糸工場へ出向 山田貞策よりの手紙を受ける

② 出崎栄太郎と山田貞策の出会い

手紙を受けて早速山田貞策宅へ 薩摩義士の宝暦治水の偉業、山林に一億八千万本の苗木を植え続けた大垣の金森吉次郎、七年間もかけて木曾・長良・揖斐川の改修につとめた稲葉郡佐波村の山田省三郎の話をきく 養老大巻での潦水排水工事の依頼を受ける

二人で新潟県中蒲原郡沼垂へ排水機の見学行↓井上源衛の工場を退め大巻の山田宅へ引越し↓排水機づくりに奔走↓明治二十九年（1896）大洪水で壊滅↓大阪へ戻る↓明治三十六年（1903）大阪天王寺で第五回内国勸業博覧会開催される 見学の会場で山田と出会い再び大巻へ排水機の研究製作 山田と知り合って十三年目に水量

によって機体が上下する・水車の羽巾が広狭する出崎式排水機を完成

明治三十七年（1904）二月十日ロシアと宣戦

③ 佐納栄三郎

大阪岸和田の富豪の家に生まれ明治二十三年（1890）大阪の中学校卒業後神戸の石炭屋へ、そして伯父の佐納権一社長の福岡県遠賀郡香月村の大辻炭坑へ、明治二十三年冬大辻炭坑門司出張所へ↓島根県簸川郡鷺の浦銅山の経営所へ転向、出崎栄太郎父子（猪之助十八才）を呼んで鷺銅山の工作部課長とする

明治三十七年（1904）佐納は東京へ↓佐納は山形県西村山郡の間沢金山の副鉱長となり福島県相馬郡上真野村の小山田の石炭山の調査に出向の節中村屋に投宿。投宿中に中村広吉の案内で八沢浦へ、現状・過去の計画を知り干拓すれば美田となると確信、養老山田の所へ↓干拓をすゝめる。出崎父子は養老の山田の所へ↓出崎式排水機の専売特許をとり明治三十八年（1905）秋に出崎式排水機製作会社の開業式を行う

資本・山田貞策 製作・出崎栄太郎 製造・大阪の川崎鉄工所 販売宣伝・佐納栄三郎

明治三十九年（1906）七月十一日佐納・山田は鹿島町へ↓翌日北海老の紺野忠を頼んで浦の実地調査をする↓七月十九日の午後八沢村・日立木村・磯部村の三村長それに郡長も立合って十九人の委員が中村町の叶屋旅館で談会後八沢浦開拓の権利を取得し、星家の隠居所を仮事務所とする

出崎栄太郎・猪之助・書記の内田弥一郎の三人を呼んで星の家へ引越し八沢浦干拓事務所開設

④ 第一期 千拓工事



湖水を海へ流し出す↓海岸の砂原に小川を掘る

順調に排水↓一夜の雨で元の砂浜に戻る

水門の修正を繰返し明治四十一年（1908）春 約三十町歩の土地が出現

稲の植付↓水害のため秋の収穫は十俵（これまでに六万円の出費）

明治四十二年（1909）二月納栄三郎の伝手で勸業銀行から貸附融資（二万円）を受ける

（川崎鉄工所から速度複式蒸汽タービン式排水機購入の為）

川崎鉄工所から部品を取り寄せ組み立て↓運転を試みるも五十日たつても稼働せず

出崎栄太郎病に伏す 雨続きで三台の排水機だけでは追い付かず

弟服部正夫の助力励し↑頭悩困憊 意気消沈の兄、翁を励まし再奮発させた影の力

翁を東京に連れ出し宗教家海老名弾正・ライオン歯磨社小林富次郎・法学士鈴木文治の三氏と会い各氏の体験談と講演をきいたあと禁酒禁煙を誓い工事完遂に突進の方向づけをする。

（昭和十六年八月二十五日発行の山田貞策著「薩摩義士の偉業」の冊子の序文を「斐川散士服部正夫」を記している。平成二十五年二月八日調べ）

⑤ 第二期 第二の出発

タービン式排水機動く見込みなし。水門を修理してもすぐ太平洋の波に壊される
昔の人の試作から↓トンネルでの排水を考える
佐納栄三郎が海に潜って過去のトンネル痕跡を調査
トンネル掘搾工事（明治四十二年（1909）八月～四十三年二月二十三日）
トンネル完成↓百五十町歩の田ができる 九月末千四百俵収穫
八月八日午前六時出崎栄太郎死逝（八沢浦干拓の第一犠牲者）

⑥ 牧師 杉山元治郎との出会

杉山元治郎―岸和田の隣佐野の生れ、大阪府立天王寺農学校卒業後、和歌山県農会技手、明治三十七年（1904）仙台の東北学院を経て牧師となる
小高町の日本基督教会に属し農民伝道に励む
山田貞策と相馬郡小高町焼芋屋での伝道会で初対面
八沢浦干拓会社の顧問役↓実地に農業の指導 週一度精神修養講座
鰻の養殖、農民の集会、農産物品評会

⑦ 山田茂治（東京農業大学卒業農学士 翁の長女の婿）

（卒業時の夢 アメリカで大農場経営、南洋で十万頭の養羊飼育）

出崎猪之助↓新沼浦六百町歩の干拓事務所へ

代つて茂治着任↓耕地整理、道路を通じ堤防を築き溝を掘り溜池を作る

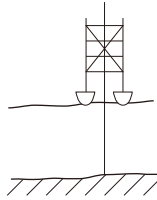
猪之助考案のサイホン式排水口

横穴づくり 大正十三年（1924）九月着工

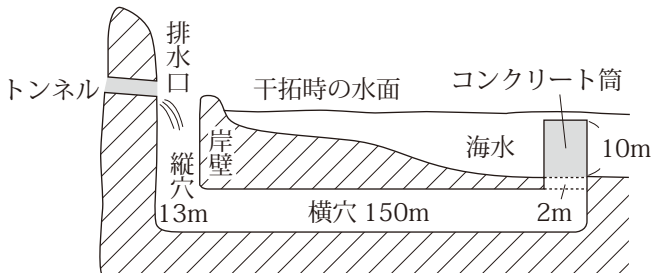
← 十四年

八月完

鉄筋コンクリートの筒の取付け



二艘の船の上に
櫓を組んで鉄の棒で
位置をきめる



大正十五年（1926）海潮の変化―海中の排水口から砂が坑内へ

三月二十四日 茂治と七人の人夫が縦穴へ↓「危険に付き入るべからず」の表示

三月二十五日 全員休業日 だが四人が縦穴へ 土砂の除去

三人が犠牲死（宇都宮清三郎 前川長命 佐藤一郎）
自然にサイホン稼働する

昭和二年（1927）六月 再び排水不能

排水口に蓋をすれば坑内の土砂を取り出しても海水は入らない

横穴の砂出し―一隊九人二時間づつの三度交替

海水の圧力で木の蓋が破壊↓海水が一気に浸入

昭和二年八月四日八人の犠牲

宇都宮栄一、紺野善助、相良亀次郎、上谷地 武、
渡辺冬治、荒 運記、大久幸為、小泉亀松

昭和四年（1929）四月二十六日 出崎猪之助死亡

サイホン式排水をやめ茂治の考案↓孫目の岩壁に四水門を設置

水門完成

水田三百十四町歩五反七畝八歩

専属小作人九十五戸

収獲 昭和七年（1932） 三千八百六十三俵

昭和八年（1933） 四千五百七十八俵

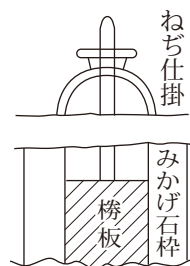
昭和九年（1934） 五千八百九十六俵

ようやく干拓事業の完成をみる

・八沢浦海岸の小高い丘の上に翁の銅像・八沢浦干拓記功碑（商工大臣町田忠治揮毫）殉難者慰霊碑

・山田神社 農業の神豊受大神を祀る（山田一家の名を永久に八沢浦の地に残すもの）

末社↓出崎父子・サイホン式排水機での犠牲者十一名の霊を祀る

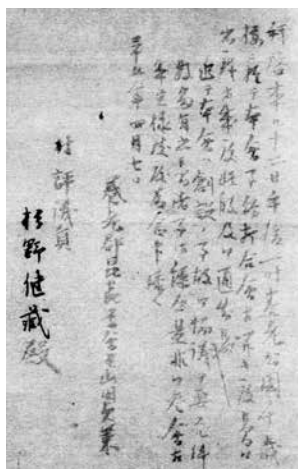


9. 翁の心意気 業績を偲ぶ

- ① 昆虫学会通知 明治三十五年
- ② 直江杉野開吉氏へのはがき 明治末年
- ③ 養老自動車株式会社 大正三年
- ④ 養老山麓の開発 大正三年
- ⑤ 修徳館 大正九年
- ⑥ 還暦白祝の扇面 昭和二年
- ⑦ 宝暦治水薩摩義士事蹟概要発刊に寄せられた奉祝の事業者の名簿 昭和七年
- ⑧ 観菊会招待状 昭和九年
- ⑨ 忍のおしえと句 昭和十八年
- ⑩ 鷺野氏より木曾川文庫へ寄贈の山田貞策図書等
- ⑪ 大巻の元屋敷

①

養老郡昆虫学会



養老郡昆虫学会

拝啓 来ル十二日午後一時 養老公園千歳

楼ニ於テ本会事務打合セヲ開キ度候間御

出席相成度此段及御通知候成

追テ本会ハ創設ノ事故御協議ヲ要スル件

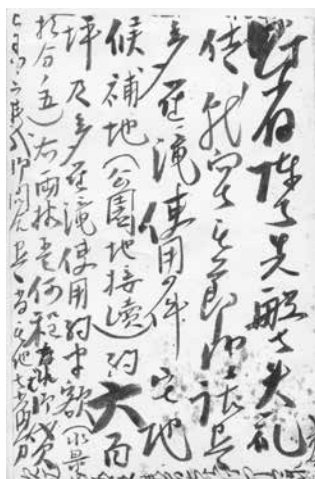
数多有之候間諸事御繰合セ是非御参加

成候様致度為念申添候

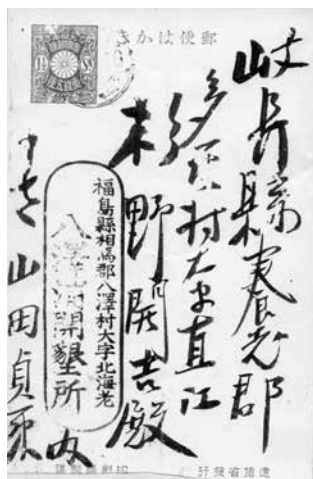
明治三十五年四月七日 養老郡昆虫学会長山田貞策

村評議員 杉野建蔵殿

② 直江杉野開吉氏 翁の直筆はがき



杉野開吉氏にあてたハガキ裏



杉野開吉氏にあてたハガキ表

岐阜県養老郡

多芸村大字直江

杉野開吉殿

福島県相馬郡八沢村大字北海老

八沢浦開墾所内

十七日 山田貞策

杉野開吉 直江村庄屋の家・現杉野明の祖父

佐竹直太郎と岐阜中学同級

直江の地蔵（西光院跡）の建立者

貞策とは懇意の仲

冠省 陳者先般者失礼

仕候 就而者其節御話申上候

多芸滝使用の件 宅地

候補地（公園地接続）約六百

坪及多芸滝使用約半額（水量

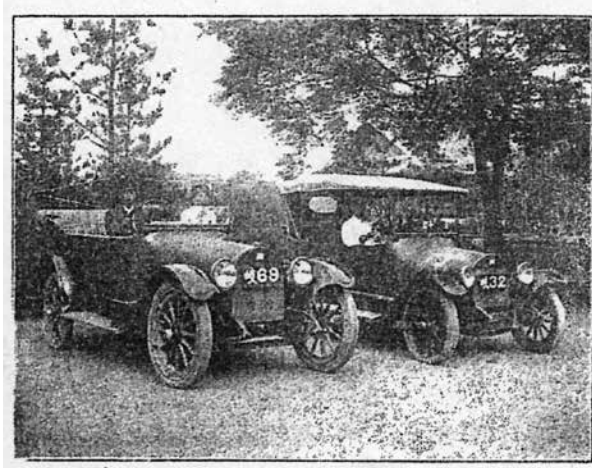
拾分ノ五）右両様にて何程なれば御貸

被成下候哉御問合申上候 尚其他者当分

見込不相立候間左様御了承被下 願上候

③

養老自動車株式会社



養老自動車

養老郡養老村白石

養老自動車株式会社

電話 高田五番呼出

輕快にして最も乗心地宜しき

貸自動車並に

養老駅より養老公園まで乗合自動車

大垣清水町

大垣出張所

社長 山田貞策

常務取締役 田代哲太郎

取締役 片野弥三郎

南谷幾太郎

傍島喜三

中島兵左衛門

佐竹直太郎

高木七郎

村上弁二

④

導水用の土管

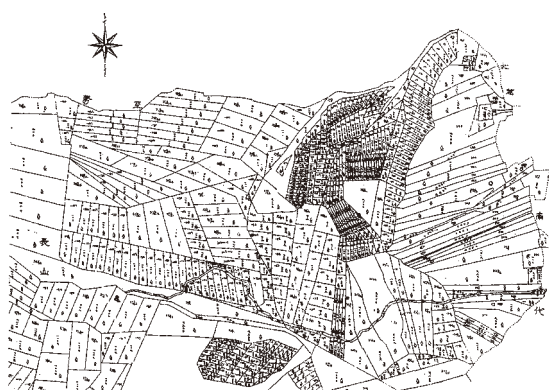
柏尾 山麓開墾

柏尾地山麓約六ヘクタールの地を開墾し、秣の滝の水を導入しての棚田づくりが、大正三年（1914）頃から実施された。大正十年（1921）頃まで続いたようだが、保水機能が水分でなく水田づくりには適当でなかった様である。この事業に遠く越前からの移住者が多かったのだろうかこの地を越前と呼ぶ人もある。現在は植林されて杉林になっているが、当時導水管として使用された太い土管が所々に残っている。

かつて石畑小学校が麓に建設された時この水を利用されていたとか別に翁が別荘地として募集された広告書もあるが場所がはつきりしないがこの辺りのことだったのだろうか



導水用の土管



⑤ 修徳館

明治末年干拓耕地整理事業を推進するにあたり 自らを律するために禁酒禁飲を表明し実行につとめると同時にキリスト教に心を惹かれ、毎日曜日には近くの町の協会に参し精神講話に和み心の安らぎを求めていた。

大正九年（1920） 自宅敷地内に修徳館を建設

昭和二年（1927） 高柳講義所と改称し広く解放し地域の啓蒙活動に活用していた。



修徳館

この建物を地元の人々は西洋館と呼んでいた。明治村が開村されるとき 移築の話もあったが大正代の建築物ということで外された。戦後衛夫妻による山田医院がここで開設されていた。

（山田ムツ子氏談 平成二十四年十二月）

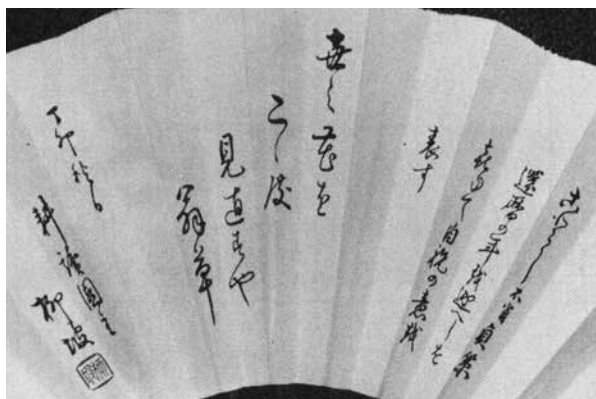
また晴耕雨読館と親しまれ村人の教養娯楽の場として利用され、時には結婚式場にもなったと

戦後各地に設けられた公民館の魁

（鷺野佳子氏談 平成二十五年一月）

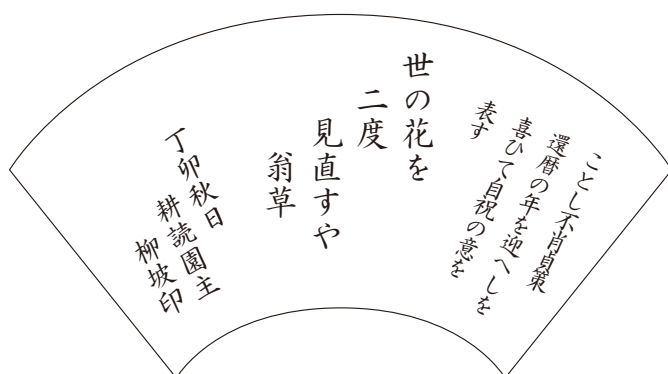
⑥

還暦自祝の扇面



還暦自祝の扇面

種田丹治 1984 養老町の文化財第 53 号より



この扇面は昭和二年（1927）の秋、翁が還暦を迎えたのを記念してその心情を自書して、親戚・知人に贈られたものである。

昭和二年の秋は二十有余年の歳月をかけ心胆を砕いた八沢浦の干拓事業の完成と薩摩義士顕彰事業の象徴である「平田靱負翁終焉地記念碑」建立の前年にあたる。

祝
發
刊

福島縣相馬郡八沢村
八沢浦干拓耕地整理
共同施行組合
委員長 山田貞策
委員 山田茂治
委員 山田利貞
同 山田利貞
庶務主任 志賀開祐
會計主任 大橋健造
技術者 新開庄太郎

祝
發
刊

大垣市郭町
日本産業株式会社
取締役社長 山田貞策
常務取締役 高木倉三郎
取締役 高田治市
監査役 伊藤久吉
同 高田俊治

大垣市郭町
日本産業株式会社

福島県相馬郡八沢村
八沢浦干拓耕地整理共同施行組合

士
刊
義
發
于
祝
意
而
敦
併

高田町 養老郡多藝輪中水害豫防組合議員
佐竹道太郎 村上定吉 吉田虎三郎 伊藤喜市
栗山村 日比正夫 大橋鶴二
久保田龍雄 田中耕馬 西脇哲次 戸倉耕次郎
上多田村 松永金吾 寺倉萬雄 栗田慶之助 田中 董
下多田村 石原敏雄 片野彌三郎 松永 弘 兄玉完治 山田貞策
池田村 伊藤茂治 松永 弘 小畑戸市 細川清四郎 山田貞策
安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一
安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一 安田昌一

養老郡多藝輪中
水害予防組合議員一同

祝
發
刊

岐阜縣養老郡池邊村教育會
會長 山田貞策
副會長 伊藤清次郎
同 山幡庄平
顧問 片野彌三郎
同 松永長九郎
同 後藤雄三
理事 水野正樹
同 杉野 薫
同 喜田千頴
同 岡田民二

養老郡池辺村
教育會

別
莊
分
讓
地

岐阜縣養老郡池邊村
山田貞策地所部

別莊分讓
山田貞策地所部

⑧ 観菊会 昭和九年（1934）十一月八日



観菊会招待状

天皇、皇后両陛下ノ命ヲ奉シ来ル八日新宿
御苑ニ於テ催サルル観菊会ニ招待ス

昭和九年十一月一日

宮内大臣 湯浅倉平

山田貞策殿

同 令夫人

正午ヨリ午後一時三十分マテニ入苑ノ事

観菊御会に御召を蒙りて

三十とせのいさをや

今日の菊日和

耕読園柳坡

⑨ 翁の心意気

① 忍の軸 〈昭和十八年（1943）七十七才〉

かたときも

忍

忘れてならぬ

この一字

皇紀二千六百三年 喜寿叟 柳坡



忍の掛け軸

② 俳句 〈昭和十九年（1944）七月四日歿 七十八才〉

・ 国のためつくしてちらん やまさくら 七十八叟 柳坡
（尽）（散）（山桜）

昭和十九年（1944）春に建立された山田柳坡碑（墓域下段）の裏面に刻

参考 昭和十二年（1937）七月七日 日中戦争始まる

昭和十六年（1941）十二月八日 ハワイ真珠湾を攻撃 対米・英・蘭対戦布告

⑩ 木曾川文庫を尋ねて

国土交通省中部地方整備局

木曾川下流河川事務所

船頭平閘門

(明治三十二年着工
明治三十五年三月完成)

平成二十五年二月八日訪問

町教委

桑名市大字福島四六七

中島和哉
高木吉一
山口一易

木曾川文庫（昭和六十二年開設）

ここに鷲野氏より寄贈された山田貞策関係図書絵葉書

1、宝暦薩摩義士事蹟概要
治永

2、薩摩義士の偉業

3、薩摩義士追悼供養祭祀記念写真四枚組の三点が保管されている。

⑪ 大巻の元屋敷

誰も住まなくなつて長年月を経た山田家の元屋敷は堤防際に竹藪となつている。わずかに門柱石と住居の一部だけ、昔日の瓦葺の建物が残つている。生い繁る竹の間に曾ての庭池を偲ばせる囲い石と石橋が苔むして面影を残している外、広い庭を飾つていた大小の石が点々と転がりあるいは半ば土に埋つている。中には此の近隣では見られず遠く伊予の国の産と言われる石も散在している。竹藪と化したこの所は筍の季節には近隣の人々の筍とりの場であるとかこの池辺地区にはあまり竹藪が存しないから恰好の場であらう。また青竹を伐つた真新しい切り口も数箇所あり何かと利用便利されているのであらう 左義長の竹かな・・・ふと頭をかすめて見入る 筍も竹も生命力の強いも

の、採らなければどんどん増えて近くの田畑へ蔓延するものであるから、農地を守るためには必要なことでもあらうし・・・でもなにか寂寞たる感に迫られる(平成二十五年一月三十一日記)



大巻の元屋敷 (東より)



大巻の元屋敷 (南より)



大巻の元屋敷 (西より)

10・震災前の八沢浦の写真



山田神社豊作踊り



機場遠景



機場内部





八沢地区遠景上流側より



八沢浦干拓地



八沢地区遠景下流側より



相馬幹線排水路



秋の収穫の後

11・震災後の八沢浦

① 被害状況（筆者の日記 特別記事より）

。平成二十三年（2011）三月十一日午後二時四十六分ごろ三陸沖を震源とするマグニチュードM8.8の大地震発生、気象庁によると関東大震災のM7.9、阪神大震災のM7.3などを上回るものであった。1923年に日本で近代的な地震観測が始って以来、北海道から九州・沖縄にかけての広い範囲で津波が発生、福島県相馬市で7.3米、岩手県釜石市では4.1米だったと。地震・津波による被害は大きく、東北各地で死者・負傷者・行方不明など膨大な数にのぼり、伴ってその火災・停電…と混乱大惨事を引き起している。

加えて福島県の東京電力福島第一原発では緊急事態宣言が発表され、原発から半径三キロ以内の住民は避難し三キロから十キロまでの住民は屋内に待機する様指示された。（三月十三日）

。津波で水没するなど壊滅的な被害を受けた市町村では連絡がとれず、安否不明の住民は数万人にのぼっていると。被害は日を経るにつれ深刻さを深め全容はまだつかめていないと。気象庁はM8.8からM9.0に修正発表。避難者は四十五万を越えていると。福島第一原発では諸機能が失われ被曝の恐れが生じはじめたと。（三月十五日）

。今度の地震は千年に一度の大地震だ！

四月十日 一ヶ月後の被害状況発表によると

地震の規模	M.9.0
震源地	450 × 200 km
強い余震	398回
津波の高さ	37.9 m
行方不明死者	27,836人
避難所生活者	46万人
家屋全半壊	59,080戸
瓦 礫	2,673万トン

1ヶ月後の4月10日
中日新聞紙上発表による

超巨大の大地震、街をのみ込んだ凶暴な津波は原発の「安全神話」を打碎いた。
被災地は余震と放射能の不安を抱えた暮しである。
今まで街を潤してきた原発の破壊・放射能の流出、一転して怖ろしい危険に
さらされることになった人々の不安はいかに…

(四月十一日)

。満二周年 平成二十五年(2013) 三月十一日被災者数

	死 者	不 明
岩 手	4,673	1,151
宮 城	9,536	1,302
福 島	1,606	211
3県以外	67	4
合 計	15,882人	2,668人

満2年後 平成25年3月11日
中日新聞紙上発表による

上記の表では放射能による被害、人々の苦しみは詳かでない。立入りを禁止
されて自分の家に住めない人々は？

巷に原発反対が叫ばれているが一ツ時に止めてしまうことも出来ないだろう？
被災の原発の処理に従事されている人々は…危険極まる作業ではないか？
何もよくわからぬ老人ながら不安やら怖ろしいやら…

(三月十一日)

② 被災後の八沢浦干拓地を尋ねて 平成二十五年四月二十五日（養老町教委 中島和哉 山口一易）

福島駅から車で山桜・山吹の咲く国道を走って約二時間ようやく目的地・八沢浦に到着。一望遮るもの無き大荒野 予想以上の凄惨さに痛む心を押え海岸に向けて修築された一本の道の途中相馬のむらから五百米程のところで中島君が停車した。何かと思った。私は気付かなかったが、さすが発掘の名主、一塊の石をみつけたのだ。立つでもなく据えられたでもない。丁度腰の曲がった私のような恰好のつながれた二個の石だ。まだ築かれた土の落着かない路肩のやや赤みを帯びた柔らかな土をそと踏んではやる心に近づいてみる。

右上部分が少し剥れているが「紀元二千六百年、山田神社建設寄付金芳名録」こ



紀元二千六百年
山田神社建設寄付金芳名録

れぞ山田神社が最初に造営された時のものに違いない。それにしても何故こんな処に？文字を辿っていくと昭和十六年四月・・・將に山田神社建設のときのものである。海岸近くの丘に建てられたと認知しているの・・・見渡す限り何一つ立ったものの無い海辺までは遙か二キロ米はあるのでないか。思わず気震を覚える。

メモし終わって車に戻ろうとした時、群がる^{うまいし}苜蓿の中に長方形の碧い



荒野となった八沢浦



八沢浦排水機場

石板・仰向けに寝かされて一筋の金具で引っ掻いたような傷あとがあるが文字ははつきり「昭和三十六年三月二十九日 八沢干拓機場開門改修記念碑」隣りに又一つ「八沢干拓創業七十五周年事業 山田神社遷宮祭執行委員会・・・名誉会長紺野栄吉以下連署・・・」これぞ神社が火災にあつて再建されたる当時のもの、排水機事務所の隣りと記録されているのに・・・これらの石板



八沢干拓創業七十五周年事業
山田神社遷宮祭執行委員会

は津波の勢に流され埋もれていたのが耕地整理作業中に近くで発見され、此所に仮置きされているのだろう・・・と低頭心拝して車に戻る。

直進するかと思いきや反転して丘の上にみた神社を尋ねると云う。相馬浦庭（後でわかった地名）の熊野神社、寄付者を辿るも山田の姓はなく公羽との関係はなさそうだ。急な石段を這うように登る途中 先行の中島君が丘下の一軒家に帰つて来た人を見掛けたからと急いでその家へ、来意を述べると「案内しましょう」と快い返事を貰った。

トラックに先行されて排水機場へ、ぽつんと残った八沢浦排水機場、ようやく今春回復して自動運転が出来るようになったと、場内に案内される。新しく取替えられた電動機以前からの配管がぎつしり並び この構えは現在で



流された山田神社跡

も東北随一の規模だと、又ここで嬉しいことに排水機事務所、再建された山田神社跡のコンクリートの土台基礎部分が存し、社の拝殿正殿などの構造が窺える形に残っていた。僅かに「山田神社」と刻した小型の石柱が寝かされていた。

排水機場を後に遊園地だった丘へ。真先に山田神社の社標が目に見え込んで来た。過日（一月三十日）津島の鷺野氏宅で見せてもらった新聞記事で知らされて

いた熊本球磨工業高校の善意によってなる新山田神社だ。喜びが湧き出してくる。つい先日、四月二十三日この社前広場で例祭が催された、その時新らしく神社の由緒書板、裏面に奉納の諸氏名、記念としての催しものの写真が展示されていた。その中に岐阜・養老・・・の文字が無く何か申訳なくまた恥しい思いにかられる。気が落着いて見渡すと数々の石碑が林立がしている。その一つ一つを出来る限りの文字を写し取る。

神社の奥に翁の寿像碑昭和三年に建設された当時は銅像であったが、戦時物資として供出され其の後石標に替えられた。台座の裏に銅像記の板が嵌め込まれていた。



翁の寿像碑



新山田神社



征服自然・
記功碑寄附金芳名碑



昭和 10 年間壱千拓竣工記念碑



殉職者慰霊碑

その横に大きく銅像記碑が見守る形に建っている。また海岸を睨む様に殉職者慰霊碑、建設会長山田貞策裏面に協力者の芳名が連記されその中に山田茂治、山田利貞、服部正夫、谷金吾、出崎猪之助の名がみられた。又昭和十年五月建立の八沢浦千拓記功碑傍に征服自然・記功碑寄附金芳名碑と立枯れ様の数本の松と共に昔を物語りげに建っている。がこれらのすべての碑は全部転倒の浮目にさらされたが皆復旧された由、よくぞここまで努めて下さったと感謝の念と地元の人々の復興への意気込みをひしひしと感ずる。

それにこの丘の下に四十戸ほどの集落があつたが全滅四十六名の死者を出し分散してしまつたと、その地を見下す様に丘の端に「東北震災被災者の霊」と卒塔婆式の木標が真新しく仏花が供えられていた。

残るのは山田家の塋であるが案内の松村さんも相馬市の方で鹿島のことは十分存知なくまして個人の墓所については不案内は当たり前、然しあちこち電話の上移住者の墓地が一軒ほど離れた海岸沿の丘にあると、ともかくその丘へ。海に向かって階段式の墓域、新しい墓石の多い中に背高い一本の石柱が目についた。何とこれが出崎栄太郎さんの



山田美祢子さん墓石



山田家の塋



出崎栄太郎さんの墓

墓だった。山田家の塋は低い所がないと思いつつも逼う様に
て上下して一つ一つ墓石を見てまわったがここでは見当らな
かった。諦めかけた時松村さんの聞き込み（近くの住民）から
もう一ヶ所あることから早速そちらへ。あったあった写真で見
ていた通り矢張り海に向かって建っていた。「昭和六年一月
山田貞策建立」とはつきり刻まれていた。木立の繁みの中に
昭和年代使用されたレンガ積み火炉の残骸もあった。塋域
の外に小さく「淑徳院静誉智峯清信女山田美祢子昭和十七年
一月二日行年二十二才」とあった。一般にはつかない院号が
ついているから・・・翁との関係はあるのだろうか。（後日、
藤原照子さんを訪問の時、照子さんの妹、茂治氏の三女であ
ることが判明）

私共の今度の八沢浦への目的は全部順調に達することができ
た。此地で今日松村さんに出合ったことは地獄で佛にあった様
な最高の幸運だった。見はるかす荒涼の地に整地作業の人影を
遠望するのみの処で、しかも取っかかりで松村さんの恵を受け

得たことはそれこそ天佑だった。この松村さんは今も排水機場の運転管理責任者であったことは何よりも有難いことだった。翁の導きか……。翁に出合った様に感じた。やれやれうれしや予想より早く目的を達し得たと喜んだ時は午後二時過ぎ急に空腹を覚えた。それにしても親切丁寧に案内を下さった松村さんも昼に自宅に帰られたのであろうに約二時間もがまんして下さったのである。

次に南相馬市の博物館へ向かう途中八沢浦小学校へ新築された校舎に百四人の児童が学んでいるとか。幼稚園も同所にあり丁度母親と帰る元気な子どもをここに来て始めて見た。また校舎内では教室移動の六年生の一人一人が「こんなにちは」と弾む声を掛けてくれ頼もしく嬉しかった。外の運動場は除菌作業中だった。

車で走り乍ら食事の場所を探したが新しい国道筋にはとんと見当らず博物館に到着。ここで文化財課の佐藤友之・博物館の水久保克英の両氏から八沢浦について承ったあと、一九〇七年にかかれた八沢浦の地図を見ることが出来た。干拓以前の地形が実に明細に記されていた。

午後四時よりホテルへ向かうがまだ二時間余りを要する上に食事の要求はまだ満たされずとうとうスーパーに立ってパンを求めたがさて場所は……。やっと道路脇の広場のブロックに腰掛けて若葉の風に満足する。午後六時すぎ福島駅前のホテルに落着く。

思えばお天気も温かさもすべて恵まれた好調の一日だった。

お世話に松村浩安さん 福島県相馬市蒲庭字館前一〇二

八沢浦は養老を出て羽島から新幹線で東京へ、続いて東北新幹線で福島へ、次いで自動車で順調に乗りつぎ走つてもたつぷり六時間以上かゝる遠距離、翁の時代は大巻を出て東京で一泊次の日鹿島へ同駅から八沢浦までどうされたのだろう。歩いたら大変なことだ。もう一つ干拓された八沢浦の広いこと三百五十町歩というから翁の所有農地の五十町歩とは比較にならぬ広さだ。これを越えて干拓事業をやるうと決意されたのは何故だろうか？ 厳しい命令があつたでもなく自由な選択が出来たであろうに… 翁の豪放大胆さ、新しい物に挑戦する進取的な気性の発露か？ ホテルの夜を話し合つたが答は出ないまゝ、

ともかく粘り強く大事業を成し遂げた偉大な実業家というより他ないと感心するのみ。

(四月二十八日 山口一易記)

③ 八沢干拓地総鎮守 山田神社 祭神 大年神 祭 四月二十三日

由緒書

山田神社は福島県相馬市と南相馬市にまたがる八沢浦干拓地の総鎮守です。八沢浦の干拓は、岐阜県出身の実業家山田貞策翁が中心となつて、明治四十年（一九〇七年）から昭和初期にかけて行われました。昭和十六年（一九四一年）に紀元二千六百年を記念して干拓地の安全と五穀豊穡を願つて創建されました。

この地はかつての山田翁邸宅跡で、創建時に山田神社が建てられた場所です。その後、社殿は相馬市蒲庭の排水機場脇にお遷しして、毎年お祭りを行ってきましたが、平成二十三年三月十一日の東日本大震災に伴う大津波ですべて流出してしまいました。山田神社の氏子でもある海沿いの通称「港集落」四十戸もすべて流され、四十六人の氏子さんが亡くなりました。避難場所に指定されていたこの高台も津波に吞まれました。

震災後、南相馬市にボランティアで来られた熊本県苓北町志岐八幡宮宮司宮崎国忠氏と人吉市阿蘇青井神社のご尽力、並びに熊本県民のご支援により、平成二十四年二月、熊本県立球磨工業高校伝統建築専攻科の生徒さん達が造った社殿が鳥居二基とともに寄贈され、この地に設置されました。鳥居の絵は神奈川県在住の絵師はとさんが、亡くなられた方々の御霊をお慰めするために描いてくださいました。

今も全国の方々から支援と参詣をいただいています。本殿再建と再生復興にかつて氏子一同頑張っていると思います。



神社の由緒書板

終りに

何も知らない者が山田貞策翁の記を著すなど、全く素手で立向かう無謀なことであり恐る恐る着手したのであるが、思わぬ方々から大きな助力を戴いて、どうにか漕ぎつけることができてうれしい限りである。

私は作家ではない。作りごとは全くできない。只管寄せられた資料を写し取ったにすぎない。ただ翁の業績を並びたてるだけでなしに、翁の心意気というか、信念というか、人となりが少しでも多く深く汲み取りたいとねがったのである。その点、翁と生活を共にされた四人の孫さんとその家族の方に往時のアルバムをもとに直接お話を承ることが出来たことは望外のよろこびであった。更に町教育委員会生涯学習課の職員の方々の温かい応援があつてのことである。又いろいろと手掛りを下さった地元の方々の力もあつてのことである。

お世話になった方、資料を寄せて下さった方々を列記すると

平成24・10・17 内堀実氏より資料拝借（平成十一年八沢浦訪問時のもの他）

11・7 // の案内で高柳の山田家墓域を訪問

12・19 藤沢市の山田医院訪問（山田ムツ子〔孫〕山田昌子〔孫〕山田裕〔玄孫〕各氏）

12・22 町役場にて栄光会主催中西達治氏の講演 薩摩義士を語るに特別参加

こゝで予期せぬ翁の薩摩義士顕彰活動の一端を聞く

翁の著書「宝暦薩摩義士遺跡概要」購入の切掛を得る

平成25

1. 30 津島市の鷺野医院訪問（鷺野佳子〔孫〕氏）
2. 8 木曾川文庫訪問（鷺野氏寄贈の山田貞策関係書籍外）
再度鷺野医院訪問
2. 10 内堀実氏を通じ根古地児玉乙羽氏所蔵の翁の著書「宝曆薩摩義士遺跡概要」初版本を借用（再
販本にない発刊に祝意を贈した芳名記載）
3. 17 平田町今尾長谷川千代子氏より今尾に民家を貸りての山田医院分院のことを聞く
3. 20 藤沢市の山田一家墓参りに来らる（墓参りと元屋敷の案内を受ける）
4. 25 福島県八沢浦を訪ねる（被災地の現状、排水機場、新建された山田神社、翁寿像外諸碑、山田
家塾、八沢小学校、南相馬市博物館）
5. 15 偶然に相馬市蒲庭字館前の松村浩安氏（排水機場管理者）に遭い親切な案内を受ける
高須に中西達治氏訪問（翁の義士顕彰活動について指導を受ける）
5. 20 午前 柏尾谷に翁の開墾棚田跡現地調査（高木吉一氏案内）
午後 池辺公民館特別講座「山田貞策の業績①」講師 椿井隆成氏 に参加
6. 12 津島市浄蓮寺訪問（鷺野佳子氏の紹介案内による）
（藤原照子〔茂治氏の娘 二女〕・同星子、鷺野佳子・同京子各氏 八沢浦時代のアルバム）

6. 24 池辺公民館特別講座「山田貞策の業績②」前回と同じ

相馬市 高橋貞子氏（茂治氏四女）より返信（紙芝居「拓く心いつまでも八沢浦物語」外）

其の外 早崎誠（直江） 田中治子（田） 渋谷民子（大野） 西脇玲子（船付）の各氏、内藤信子（養老公園）

多くの方々の力の結集として今一冊の本になろうとしているのだ。まことに有難い極みである。

翁は薩摩義士顕彰会報の中で「薩摩義士の如き産業上の献身者こそ、真の義士の模範となすべき」と述べておられるが、翁こそ将にその言を実践した実業家と言うべきでなかろうか。そして又翁を支えられた家族の方みんなが翁の意志を汲んでの一致団結が輝やかしい業績を築き上げて来たのだと強く思うのである。

終りにお助け、励ましをいただいた各位に深く御礼を申し上げると同時に山田貞策翁の心を一人でも多くの人に知ってもらい、義士的な次代を担う若人が輩出してくれることを強く念願するものである。

更に今回の大災害に皆滅の被害を蒙られた地に一日も早く緑がもどり花が咲き笑顔が蘇り豊年踊りが奉納されることが来ることを祈念する次第である。

平成廿五年六月二十七日 山口一易記

みんなが喜ぶことに力を尽くした

山田貞策さん

発行 平成二十五年八月十三日

発行者 養老町教育委員会

編集 ナカシヤクリエイト株式会社

忍

かへとき茂

忘れてはらぬ

この一字

皇元二十六年三年 森島正和